ゼロのイーヴァルディ

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロのイーヴァルディ

【Ｎコード】
Ｎ９８４９Ｋ

【作者名】
黒猫

【あらすじ】
死――平賀才人の物語は突如として終わりを迎え、そして終わりからまた始まりの物語を起こす。二度目の世界は、彼の瞳にはどの様に映る？

第０話（前書き）

時系列・キャラの性格・文体等が滅茶苦茶で、作者の力量上、風景や心理描写が薄く設定等が突っ込み所満載です。気にしないよと言う、神様のような方がいらっしゃるのなら、覗いてやって下さい。

第0話

《神の左手ガンダールヴ、勇猛果敢な神の盾。
左に握った大剣と、右に掴んだ長槍で、導きし我を守りきる》

目がかすみ、意識を保つことが難しい。無理の積み重ねからくるツケで体中が軋む。
誰の目から見ても最早致命的であろう、全身に刻まれた傷から溢れ出る出血量。
倒壊し、燃え盛る屋敷の中庭で思う。

（なんでこうなったんだ？・・・何が足りなかった？）

権力、知力、戦闘力に人脈や金か？
平民の成り上がりだからか？

「――――棒！相棒っ！！しっかり――――！！！」

左手に持ったデルフリンガーが何か言ってるけど、もう聞こえねぇ。

「旦那っ！！――――傷は――――！！」

右手に力なく掴む地下水も何か言ってるけど同じだ。
久方ぶりの自由な時間が与えられたので、ちょっくら旅にでもと思ったのが間違いだった。
アンリエッタ女王から紹介された貴族の別荘が、まさか俺を嫌う奴らの暗殺計画の拠点とはね。
いち早く自分だけ来ていたのだが

（ルイズ達が遅れてくるのは正解だったな）

一個人を始末するには余りに多い敵さんの数と周到な罠にもはや呆れるしかなかった。

（・・・平民（家畜）の英雄など要らないか）

今までも似たような事はあったけど、ここまではなかったよなぁ。

段々と薄れ行く意識の中で、諦めと共に苦笑を浮かべると

「ル・・・イ・・ズ」

ごめんと、呟き彼は事切れた。

◆

それは神の奇跡か悪魔の悪戯か。

件の少年は深い眠りから目を覚ます。

日本のとある住宅街にある一軒家。

カーテンの隙間から差す朝日が脳を刺激する。

「うう・・・なんだよねみぃ」

ゴシゴシと目元をこすりつけ体を起こすと聞こえてくるなじみ深い声。

「相棒やっと起きたか！いやぁ心配したぜ！！」

「全くだ。旦那！冷や冷やしたぜ！」

うん？と首を傾げながら自身が寝ていたベッドの中に剣と短剣が見つける。

「なんだよお前ら。昨日一緒に寝たっけ？」

周りを軽く見渡し、目に入る懐かしいモノ達をあえて無視し話しかけるが

「いやぁまったくおどろいたね。まぁ相棒がどうなろうとここがどこだろうと、俺っちは相棒の味方だから」

「そうそう、安心してくれよ旦那」

軽い声とは裏腹に、妙にしんみりとした話し方に、寝起きで寝ぼけた頭がもう限界だよこのやろう！現実逃避はおしまいと指示を出す。

「なんじゃこりぁぁぁっっ！！！」

懐かしい日本の我が家。
しかも、周りの置物やオモチャは、遥か幼き日の物ばかりで、いや本当は気付いていた。
アニメ柄のパジャマに身を包んだ自分の体がやけに小さいことを。
とりあえず寝起き一発目、いや日本帰還一発目に彼は絶叫しながら

「相棒がお子様になっても相棒さね」

と言うデルフリンガーの慰めを聞くのだった。

◆

どう見ても、何度見渡しても平賀家。
しかも俺お子ちゃまだし。
なんか過去っぽいし。
デルフリンガーや地下水に、ここはどこで何でこうなっているか、てか過去なら何でお前ら居るんだよ！などと話し合うが

「俺、剣だし。伝説でも剣だから」

「諦めと受け入れが肝心だぜ旦那」

あまり役に立たない金属達にため息をつく。
まぁ、考えてもわかんねぇよな。
生来の能天気さを発揮すると、それよりも真剣に考えることが、否！確かめる事があるとばかりに下半身素っ裸になると

「くすん」

やはり、当たり前だが小さかった。
まぁ元より可愛らしいジュニアだったのだが、記憶を変な所で美化した才人は嘆き悲しんだ。
なんだよこのやろう！俺のトマホークがいやいや言い過ぎたせめて４４マグナムを返しやがれ！！
下半身を見つめながら、ため息を吐き出し、鬱になる見た目５歳程

の幼児。
なかなか笑える光景に
「いやあんまり変わってないよ？」
どっかのバカ剣が突っ込みを入れるが、聞こえない。聞こえないったら聞こえないのだ。
脳裏には、これ幸いにとニンマリと笑みを浮かべる桃色の悪魔が
『あら可愛らしい。なにそれナメコ？あんた、ご主人様のむむ胸、さんざん小さいってバカにしたけど、あああああんたのソレの方が、ちちち小さいじゃない！あああああそこがナメコなんて可哀相な犬ねっ！！！』
どもりながらも、勝ち誇ったように薄い胸を反らす姿が。
「ナメコいやぁぁぁっ！！」
絶望に苛まれながら、叫ぶと
「うるさいわよ才人！」
ガチャっと扉が開く音と共に、耳に入る声。
「・・・・・あ」
振り返ると懐かしい母の姿。
記憶より若いが紛れもなく母だ。
ジワリと目に涙が浮かぶ。
あぁ、俺ってこんなに寂しかったんだ。こんなに好きだったんだと

思うと止まらなく

「母さんっ！！」

涙ながら抱き付く。

・・・下半身丸出しで。

「母さんまだそう言うのは早いと思うの」

「お前まさか・・・母さんは渡さんぞ！」

どこか抜けた感想を漏らす母と、いつの間にか現れた父を見て、また感極まり泣き出す才人。

とりあえず平和な朝だった。

第1話

あれから色々あったが、今は元気な１１才。
母や父に身に起こった出来事を話すも、割とすんなりと受け入れたのは意外だった。
まぁ、昨日まで無かった長剣と短剣があり、しかも会話が出来るなど流石の技術大国日本でも無理な話だし、あきらかに幼児とは思えない会話能力に知識や態度。信じるには十分過ぎたのは確かである。
普通なら、そんな子供など気持ち悪がるのだが、幸い両親共にそんなことはなく、また才人自身が中身がお子ちゃまのままだと言うなんとも彼らしい事もあり、日常を過ごしていた。
両親やデルフリンガー達を交え、謎を解き明かそうとするも出来るわけもなく、それならと父にもし高校生になって召喚されても困らないようにと、様々な知識や体を鍛えることを押し付けられた。
また召喚されるかも解らない、そもそもデルフリンガーや地下水が居ることが異常で未来のある程度の知識まであり、両親も納得済み。
これって召喚に影響ないの？など考えるも、あの時の悔しさが忘れられない才人は準備に取りかかる。
もっとも真面目に取り組んだのは最初の数年だけで、今はまだ時間あるしみたいな感じだが。
業を煮やした父の訓練と評した嫌がらせに

「未来にこいつ浮気するぜ母ちゃん」

と嘘を付いて、折檻される父を見て笑ったのは内緒である。
まぁ、そんな彼は今せっかくの日曜日だと言うのに、父に命じられて買いに行かされた様々な参考書や技術書と格闘しながら、家路に急いでいた。すれ違う人のほんとんどは、黒髪黒目。
非常に目に優しく落ち着く。

「重いんですけど。てかありえねぇ。いたいけなお子ちゃまにこんな分厚い本何冊も買いに行かせやがって！」

まじありえねぇ！何あのオヤジ！とプンスカな少年に答える声。

「まぁ相棒の為だと思っての行動さね」

「そうだぜ旦那。今度こそは後悔しない為にだろ？」

銃刀法違反全開だが、こうも堂々と剣を背負い、短剣を腰に差すと意外に注意されない。

見た目がお子ちゃまのおかげもあるのだろう。身長に合ってない長剣が笑いを誘う。

「まぁ、お前を背負っても苦しくはないくらいには鍛えてる場所提供してくれたしな」

この年で大剣を扱うなど普通なら無理なのだが、どこから見つけてきたのか武術や剣術師範に苛められたらせいで、それ程苦にはならない。

「もっとも全盛期には程遠いがね。あん時の相棒はガンダールヴだったし」

「仕方ないじゃん。お子ちゃまだし」

剣圧で敵吹き飛ばせたしなぁなどと懐かしむ。

「このまま行けば、全盛期も超えるさ旦那！魔法の勉強だってして

るし」

魔法は使えないが、戦うためには魔法の知識が有る無しでは全然違う。

地下水を先生に勉強し、それなりに詳しくはなっている。

「自力じゃ使えないけどね」

「だってメイジじゃないもの」

残念。ガンダールヴを常に発動させ修羅場も数多くこなしているのだ。

精神力なら並みのメイジには負けないのだが

「メイジの血って偉大だね。旦那じゃ俺を使ってもラインレベルしかでないし」

うるせいやい剣士だもん。俺剣士だもの。

理想に描いていた魔法戦士になれずちょっと悲しい才人。

へこんでいる為か、はたまた雑談している為か、だから気付かなかった。

目の前にいつか見た、鏡が浮かんでいたことに。そしてそれに足を踏み入れてしまったことに。

「え？」

「旦那っ！？」

間の抜けた両剣の声を聞き、事態を把握するも時すでに遅く。
「ちょっ！まだ１１才なんですけどぉっっ！！？まだナメコなんですけどぉぉっっ！！？」
日本最後のセリフが実に情けない内容となった。

◆

「うぅ・・・なんだよ」
少しの間気を失っていたのだろう。
目を覚ますと、中世ヨーロッパの宮殿を思わす広い室内。
「目ぇ覚めたか相棒？」
「ここどこだ？」
デルフリンガーに返すも返事がない。
（魔法学園じゃない？つーか当たり前か。まだ皆ガキだろうし）
魔法学園じゃなければ、ルイズの家にも見えない。
じゃルイズは？俺ルイズの使い魔じゃないの？
ショックを受ける才人。
いやまてまだ希望はある。でも何か見たことある造りだよな。
一人悶々とするなか言い争うような複数の男の声。

「――子供――。――――」

「仕方ない――――。――――兄さん」

ちらっと視線を向けると蒼い煌めく頭が二つ。
二人とも美形である。

その内の一人に見覚えがある才人に、ジワッと浮かぶ冷や汗。
イヤイヤ違う見間違いありえねぇなにこれほんとねぇ！
現実逃避する彼に、地下水がトドメを差した。

「いや何か見覚えあるなと思えば、ガリアだよ旦那。まだこん時は俺居なかったけどね」

地下水やデルフリンガーの声に、惹かれたかのように二人の男性が近寄ってくる。

「インテリジェンスウェポンを二つも持ってるんだ。兄さん当たりだよ！契約を！！」

「・・・悪く思うなよ少年。できうる限り保証はしてやる」

諦めたのか、そう言うと契約のルーンを唱え顔を近づける。

（えっなにこれ！じじじジョゼフっ！？ウソウソ！？）

仇敵だった男の姿にテンパる彼は

「～～～～～～っ！！？」

ぶちゅっと口付けを交わされてしまう。
ちょなにこれ、ジョゼフとちゅー？ありえねぇったらありえねぇ！
まだこの体ではキスまだだったのに嘘お婿さんに行けない！
など一瞬で考えるととりあえず叫ぶことにした。

「オヤジいやぁっ！やり直しを要求するぅ！美少女！巨乳美少女百人を連れてこいっ！！」

「いやそれはちょっと」

できうる限り保証すると言いながら、いきなり出来ないジョゼフとバカな才人のこの世界での出会いだった。

第2話

ガリア王国の王都リュティス。
大陸内陸部にありながらも、太洋に流れ出るシレ河の沿岸に位置し、様々な発展を遂げている。
人口三十万人を抱える都市の郊外にある森を切り開いて建てられた、王族の居城【ヴェルサルテイル宮殿】
その宮殿の一室で

「いてぇ・・・」

そこでサイトは、ぼろ雑巾のようになった体をベッドで休ませていた。
只今１４才。
召喚されて早三年の月日が流れていた。

「いぢめだ・・・いたいけな少年に対する訓練じゃねぇよ。俺ガンダールヴじゃないのに、ミョズニトニルンなのに」

ミョズニトニルンは文系だよと軋む体を慰めながら呟く。
そう、当たり前かも知れないが、ガンダールヴではなかった。神の知恵、神の本。または神の頭脳と呼ばれるミョズニトニルンだったのだ。
じゃシェフィールドは？とかジョゼフが運命の人？など色々考えて鬱になったりもしたが、考えてもわかるはずもなく、また元の世界とは違うのだろうと無理矢理納得した。
いや納得など無理だけどね。俺ルイズの使い魔だし。元だけど。
まぁ紆余曲折有りながら今に至る。
単なる少年に与えられるには過ぎた部屋。

飾り気こそ少なくシンプルな造りだが、二十畳程の部屋と続き部屋である更に広い二部屋。
研究室として使っているそれらと合わせ計三部屋から見て、扱いの大きさがわかる。
普通、王族が住まう宮殿に部屋を与えられるなどない。
しかも三部屋。ましてや平民の子供などにはもっての他である。
ならば何故、与えられているのか？
現国王ジョゼフの知り合いと言うのもあったが、召喚時に持ち込んだ様々な書籍や知識でのガリアの改革成功の功労が大きい。ミョズニトニルンのルーンのおかげが勉強してもさっぱりだった各知識が理解出来るようになり、様々な物が改革に適用された。
理解しても分かるのは別と言うのはあったが、それはそれで、こんなのあるよと提示すれば考えてくれる人など他にいるのだ。
丁度王座をジョゼフが継承した時に、それなりにゴタゴタがあり、またサイトを気に食わない者達が色々企んだりしていたのを良いことに、それらの貴族を粛清や懐柔し王権の強化の為に、知識や技術を求められたのだ。
個人的に粛清ってとビクビクしていたのだが、国の為にと理解はし、また以前みたいな酷い粛清はなく王弟シャルルやシャルロットも健在のため、また自身の居場所強化のためにはと貢献していった。
ノリノリなジョゼフに、とりあえずは増えた直轄領からと愚見し（領主達の非難を防ぐため）、改革にいそしんだ結果あらゆる面で成功し、旨味を理解した様々な領主達が改革に名乗りを上げはじめ、ガリアはここ三年でかなりの好景気を迎えていた。
おかげで、サイト自身に嫌がらせをする者は減ったのだが、それでも理由を付けて手を出そうとする者もおり、一年ほど前にあまりの忙しさにイライラしていた時に絡んできたおバカさんと決闘騒ぎを起こしてしまっている。
相手は下級貴族三人。
しょせん頭でっかちの子供の平民と侮ったのが命取り。

ガンダールヴでは無く、未だ子供とは言え、数多の修羅場を潜り抜け実践豊富なサイト。
またガンダールヴの力を補うために修練を欠かさなかった彼に、油断も有り瞬く間に二人がのされ、残りの一人は地下水の進言により魔法で倒した事により、周りの扱いが向上したのだ。
杖を使わなくても、変換媒体があれば魔法は使えるのは知られており、地下水の目論見通りにメイジと勘違いされたのだ。
サイトは、いやなんか嘘は悪いよね。
と及び腰なのだが、これ幸いとジョゼフやシャルル、または彼を気に入っていた貴族連中が擁護して現在に至る。
別段、地位身分を与えられたわけではないが否応無しに一目置く存在になり、この部屋や宮殿内の自由がそれを物語っていた。
また剣術を見せたせいで、研究の合間に各騎士団から訓練と称した可愛がりにあうのが彼の日常だった。

◆

「相棒がんばるねぇ。ガンダールヴじゃないのに」
デルフリンガーの声に、体を起き上がらせ
「好きでやってるんじゃねぇよ」
ふてくされながら答える。
「これからどうなるんだろうな」
そう呟きながら思う。
もはやここは自分が知っていた歴史ではないはず。

シェフィールドの代わりに、サイトがミョズニトニルン。
シャルルは生きており、その夫人も健在でジョゼフとの中も良好。
サイト自身も、召喚時にはジョゼフに怯えたが今では年の離れた親友か親子のような関係だ。
実際、サイトの存在がジョゼフの心を解放し過去の忌まわしい行為に及ぶ事はなくなったのだ。
身分や年齢など関係なく本音でぶつかる彼にジョゼフは救われたのだ。
だからこそサイトを擁護する。
まぁ面白おかしくが好きなことには変わりないので、笑えない嫌がらせは多いのだが。
ルイズと離れて、もう八年程になる。どんどん記憶が薄れ、気持ちも不確かになる自分に絶望し枕を濡らした数など数え切れない。
おれはルイズを好きじゃなくなったのか？もう相応しくなくなったのか？など次から次ぎへと考えて、へこんでしまう。
へこみたくはないが故に、研究や訓練または盗賊や幻獣の討伐などに勤しみ逃避し続けている。

「これで良いんじゃないの？娘っ子にコキ使われることないし」

「・・・・・」

軽く話すデルフリンガーに、落ち込んだままのサイト。
見かねたのか声音を真面目にして言う。

「歴史が変わったおかげで、娘っ子が危険にあう事もなくなって皆が不幸になる争いもなくなった。これって相棒が娘っ子の使い魔として護りきった事だと思うね」

「そうだぜ旦那。一緒にいることだけが愛じゃないぜ」

追随するように地下水が言い、そうだよなとサイトは持ち直す。
「まぁ、誰も相棒の事知らない空回りだけどな」
ぶち壊しなダメ剣に
酷い酷いよと、泣き崩れるサイトが持ち直したのは夜遅くだった。

◆

落ち込みから立ち直り、いつもの脳天気さをとりもどしたサイト。
デルフリンガーと地下水相手に雑談をし時間を潰していた。
「つーか、お前らこの世界にもう一つのお前らいるんじゃないの？」
「相棒・・・なんか今更な疑問だね」
「初めに疑問に思うべきだぜ」
うっせいやい、色々忙しかったの！
と突っ込みに口を尖らせる。
「相棒の疑問はもっともだけどね。なんか合体したみたい。いやぁなんかこっち来てから伝説、力が溢れてるんだよね」
「は？」
はてなマークで返すサイトに地下水が答える。

「この世界に来た時に、この世界の俺らと同一存在になったのさ。
旦那が過去の自分と同一になったみたいに」

「何ソレ？訳わかんねぇ。元いたお前らはどうなったんだよ」

「消えたよ」

「おいおい、大丈夫かよ！不信がられねぇのか？」

「もとより俺は正体不明だったし、デルフの兄貴は・・・」

「寂れた武器屋に正体隠していたしね。大丈夫だ」

「なんだそれ。早く言えよ」

「いや聞かれなかったし」

はぁっとため息を付きながら、両剣を見やる。
なんかいい加減だよな。今更だけど。
と呆れていると
コンコンと扉を叩く音が聞こえてきた。

「どうぞー」

気のない返事を返すと、入ってきたのは小柄な少女。
鮮やかな蒼髪と瞳を持った、かつての世界でタバサと名乗った少女、
シャルロットがテクテクとベッドに近寄ってきた。

「兄様、また異世界のお話して」

ぐはっ兄様だとぅ！
家族同然に過ごしているために大変懐いているシャルロット。
今ではこの王宮に週の半分は住み着き、シャルルを寂しがらせている。
何回兄様と呼ばれても、以前のイメージがあるために慣れない。
実年齢より更に幼く見えるロリロリな彼女。
記憶にある姿より甘えん坊なシャルロットにたじたじである。

「異世界――俺のいた世界の話ね」

「うん」

ベッドに腰掛け、上目使いでこちらを覗き込むシャルロットに
可愛いじゃないかちくしょう。いやまて俺はロリではない、いやしかし俺まだ１４才だしこれもまた、などと慣れない愛情に悶える。

「？」

そんなサイトを見て、首を愛らしく傾けるシャルロットにもうノックダウン間近である。

「相棒・・・踏み外したか」

「モテない男の勘違いだね」

なんか聞こえるが無視である。

「さて、じゃあこんな話はどうだ？」

意識しないよう、物語を口にする。

心躍る冒険団。
その内容にシャルロットは目を輝かせながら、聞き入るのだった。
「仮面ライダーかっこいい」
ちなみに初代である。

◆

「ふんふーん」
早朝、サイトの部屋へと歩るく少女。
長い蒼髪をツーテルにし、キラリと光るオデコが眩しい美少女の名はイザベラ――現国王ジョゼフの娘でありシャルルが王位を放棄しているため、第一位の肩書きを持つ彼女は、いつもは勝ち気なつり目を緩めながら、大変ご機嫌な感じで目的地へと進む。
『やぁ、今日も可愛いね僕のお姫様。今日は久しぶりの休みだから、君に1日捧げるよ。キラっ！』
やたらと美化されたサイトと思わしき物体を思い浮かべながら、顔を紅くする。
「ふふ・・・うへへ」
妄想でだらしなく崩れた顔。
美少女台無しである。
王族の高貴さもへったくれもないのだが、すれちがうメイドや衛士達からは

『またいつもの御病気か』
と軽く流されている、少し哀れな彼女だった。
「すぅ～はぁ～・・・」
サイトの部屋の前に到着すると軽く深呼吸。
ヨシっ気合いを入れて、ノックせずに扉をあける。
「何よ・・・まだ寝てる？」
薄暗い室内を見渡し、ベッドの膨らみに目を向ける。
いやいや、これはこれで寝顔ゲット！あわよくば添い寝。そしてお早うのちゅー！
いやんいやんと体を揺らす早熟娘。
いざ突撃と、ベッドに歩みシーツをめくると
「・・・・・・・・」
幸せそうに笑みを浮かべて、サイトに抱きつき眠るシャルロットが。
ヒクヒクと口元を痙攣させ、怒りのボルテージを高めるイザベラ。
自分も同じ事、いやもっと上の事をしようとしたくせに、そんなこと忘れたかのように
「何してるんだぁっっ！！」
シャルロットを引っ剥がすと、サイトの顔を勢い良く踏み抜いた。
「ぴいぎゃっ！？」

何か潰れたような声を出しのた打つサイト。
のぉぉっと呻きながら顔を押さえるサイトに
「ななな何してるんだいっ！！若い男女が寝台を共にするなんてっっ！！」
怒り心頭のイザベラ。
痛みを堪えながら、状況を把握するサイト。
寝ぼけ眼で、サイトとイザベラを見るシャルロット。
「いやっ違うこれはっ！！」
「兄様、昨日はとても良かった（話が）」
「！？」
「ちょぉっ！？言葉は正確にっ！！」
ふにゃふにゃと幸せそうに、寝ぼけたシャルロットはサイトに抱きつく。
「ふふ・・・そう」
ワナワナと震えながら、俯き不穏な声音を出すイザベラ。
なんか八年程前に覚えある光景にアワアワと後ずさるが、時すでに遅く
「ここここの犬ぅーーっ！！！」

「犬きたぁーーーっ！！！」

何処からか取り出した鞭を振りかぶるイザベラに、懐かしい面影を見いだしながら意識を飛ばしたのだった。

第3話

王城【グラン・トロワ】
内外の様々な建築者達を招き建てられた、巨大な城。
一種の名物にもなっているそれは、薔薇色の大理石と青い煉瓦で造られている。
驚くべきは、未だに拡張され続けている事だが、王都に訪れた大半の者達はその荘厳さに溜め息をつき、一部の者達は税金の無駄遣いと笑う。
その王城では、現在定例会議が行われていた。

「近頃周辺の小国連中が騒がしくなっているようです」

「小国連中がイザコザを起こすなど何時ものことよ」

「さよう。気にするだけ無駄と言うものだ」

報告される内容に、官僚らが軽くいなす。
その様子を眺めながらジョゼフは思案していた。
本当にいつものイザコザレベルの話か？
妙に胸騒ぎがするジョゼフは監視体制の強化を命じるのだった。

◆

トリステイン国境部に位置するオルレアン公領。面積六百キロメイルと言う、巨大な湖――ラグドニアン湖をトリステインと共に有するオルレアン公シャルルの屋敷にて、話があると呼び出されたサイトは通された居間でビクビクと怯えながら、シャルルの登場を待ち

わびていた。

まさか一緒に朝まで事件（イザベラ命名）がバレたのかっ！？
どどどうしよっ！？
温厚紳士なシャルルは、シャルロットが絡むと人が変わる。
所謂親バカである。
とりあえず傷が浅いうちに、ジャパニーズ土下座を如何に決めるかと悩んでいると

「やぁ待たせたね」

夫人を伴い現れたシャルルに軽く会釈を返し二人を見る。

（いつも思うけど若すぎるだろ？ジョゼフもだけど）

どう見ても二十後半代にしか見えない二人に、王家の不思議さを考えようとして
違うっ！今考えるのはこれじゃねぇっ！
と意識を戻し
よし！とりあえず謝ろう！！
と腹を決める。

「シャルロットの事なんだが」

「すんませんでしたぁっ！！」

シャルルの言葉を遮り、膝をつくと見事な土下座を披露するサイト。

「へ？」

あまりの事に間の抜けた声を出すシャルルに

「いやだからシャルロットの事で怒ってるんすよね？」

「君は勘違いしてるよ。と言うか何かしたのかい？」

呆れた態度を見せると、すぐに眼光鋭くサイトを睨む。

すわっ早とちり！やべぇっどうしよっ！！

つかなくても良い藪をつついたサイトは、腰を引けながら半笑い。

そんな姿を見ても、ふぅと息を吐くとシャルルは爆弾発言をかましたのだった。

「娘と婚約しないかい？」

「ふへ？こここんにゃくっ！？」

「婚約だよ」

テンパるサイトに、優しく話しかけると

「もちろん正式なものではない。今のままでは無理だろう」

混乱するサイトをよそに話し出す。

「今のサイト君の身分では無理だし、妬みも今以上に飼う。だが娘――シャルロットは君にご執心でね。なるべく叶えてやりたいのだよ」

「そんな、急に」

「正式ではないのだから、心の片隅にでも置いといてくれ。先程も言ったけど今の君では無理だしね」

「・・・はぁ」

突然の事態に言葉など浮かばない。

「おそらく兄さんもイザベラの事で、似たような事を言うはずだが」

ポロリと呟くシャルルの言葉は、サイトには届かなかった。

◆

悩むサイトを残し、部屋を出る。

「混乱していましたわね」

「仕方あるまい。いきなりだし彼はまだ幼い。それに厚遇されているとは言え平民だからな」

妻に返すと、だがこれからはあの子のような子が必要だと続ける。

「彼のような捕らわれない精神を持ち、あの黄金より貴重な知識。失うわけにはいかない」

いかに使い魔と言えど、強制の力はとうにミョズニトニルンの知識によって無くしている。

いつ他国に目を付けられるかわからないのだ。

何としてでも手元に置かなければならない。

それがジョゼフ、シャルルの共通の見解だった。

「それに、私も兄さんも彼には多大な恩義を覚えている」

二人が心奥底に閉まっていた様々な感情。
それを幼い彼が解きほぐしてくれたのだ。もし、彼と出逢わなければガリアの伝統のように兄弟で殺し合ったかもしれない。
無能と蔑まれた兄は、伝説の虚無の担い手だった。
召喚された少年は、同じく伝説の使い魔だった。彼は兄弟の心を救うだけではなく、国を救ったのだ。

「まだ甘えたい時期だろう少年を異世界より連れ出し、これ以上無いほどに国に貢献させている。
彼が地位や身分を得れないのならば、他のどの貴族もマントを脱ぐしかない。帰る方法がわからない以上ここに居場所をあげたいんだ。
私も兄さんみたいに彼を息子と思ってるからね」

シャルルはそう言うと

「まぁシャルロットとイザベラの想いの為でもあるけどね」

父親の顔で笑みを浮かべたのだった。

◆

「大変な事になった」

事態の大きさに、戸惑いを見せるサイト。

「あくまでも口約束。候補の一人だろ？」

お気楽なデルフに

「貴族の口約束は、単なる口約束じゃないぜ兄貴」

地下水が知ってるかのように答える。

どうしよう。俺大出世！嫌だめだ。俺はルイズが好きなんだ。

「会いてぇよ。ルイズ」

どんよりオーラを醸し出すサイト。

見かねたデルフと地下水が

「まぁ考えても仕方あるめぇよ相棒。いくら貴族の口約束って言っても、王弟もあくまで心の片隅にって言ってただろ？」

「そうそう。旦那なら王族に相応しくなるほどに期待しているって意味だぜ」

「逆にプレッシャーが」

うーんと悩むも、確かに考えても仕方ないよな。もしかしたらの話しだし、うん。

考えるのを止めて、トイレにでもと立ち上がった瞬間。

轟音が聞こえ同時に屋敷を襲う衝撃に、サイトは床に叩きつけられた。

◆

「う・・・く」

「相棒っ！目ぇ覚めたか！！」

打ち所が悪かったのか、少しの間気を失っていたらしい。

「なんだ・・・？何が起きてるんだ？」

窓越しに炎が見える。
あちこちにひびが入り、物が散乱している部屋の惨状を見ると

「ここでこんなのなら、他は・・・そうだシャルルさんっ！？」

デルフリンガーと地下水を掴むと慌てて部屋を飛び出す。
部屋を飛び出してわかる。倒壊寸前だと言うことが。

「くそっ！何なんだよっ！」

「落ち着け相棒っ！外だ！外から争ってる音が聞こえる！」

デルフの声に従い、崩れかける屋敷を走り抜けるサイト。
借り受けた部屋が一階だったのが良かったのか、危なげなく外に駆け抜ける。
どこだ！と庭に充満する煙を払いのけ見渡す。

「相棒っ上だっ！！」

「なんだよ・・・あれ？」

デルフの声に従い、上を見上げるサイト。
目に入るあまりに非常識なモノに思考が停止しかける。
何故これに気付かなかった？煙のせいか？

そこにいるのは巨大な、巨大過ぎる朱き竜。
今まで何度も竜種は見ているが、それらが蟻に思えるほど比較にならない巨大さと威圧感。
見るだけで体が震え止まらない。
原始の恐怖、人類が遺伝子どころか魂にまで刻みつけられた恐怖がサイトを襲う。

「やべぇっ！ありゃ韻竜！しかも古代種だっ！！」

「北の火竜、暴君だぜ旦那っ！！」

人が絶対に出会ってはならないモノに大きく二種類いる。
エルフと竜。
しかも古代種。
数千年に渡り生きてきた古代種の竜――彼らの力は神にも匹敵すると言われている。

宙に悠然と浮かぶ火竜を呆然と眺めていると

「サイト君、逃げ・・・るんだ」

かすれた声で告げる声。

「シャルルさんっ！？」

意識を立て直し、声の方に走り寄ると

「な・・・！？」

「情けない、天才と呼ばれてこの様だよ」

至る所を火傷し切り裂かれて倒れているシャルルの姿があった。

「シャルルさんっ！」

「私達は良い、早く」

私達？その言葉に、すぐ近くに倒れている女性が見えた。
見た目傷らしいものは見当たらない。
気絶しているだけかと、安心すると

「薬・・・変な薬を飲まされた」

「薬？」

シャルルの言葉に問い返すサイトに

「そう薬だ。ちょっとした茶番劇のな」

「！？」

火竜から聞こえる声。
否、火竜の頭に佇むロープに覆われた人物からの声に反応するサイト。

「茶番劇だと？」

こいつは誰だ？
こいつは何を言ってる？

男か女かわからないその人物を睨み付けると

「茶番劇だよ。本来の歴史に近付ける劇だ」

本来の歴史？
その言葉に冷や汗が浮かび上がる。

「なぜこうなったのかわからないが、我が主は歴史修正をご希望なのでな。そこな女は精神を狂ってもらい、王弟は死んでもらう」

精神を狂わす？死んでもらう？
何を言ってる？
コイツは、ナニヲイッテイルンダ！？

「ふざけるなぁぁぁぁぁぁっっっ！！」

怒りに恐怖が弾け飛ぶ。
覚えている。
タバサの涙を。
覚えている。
ジョゼフの絶望を。
あれをまた繰り返すのかっ！！

「うぉぉぉぉっっ！！」

怒りが力になり漲る。
かつてのガンダールヴのように疾走すると、全身のバネを使い飛び上がる。
「はぁぁぁぁぁっっ！！」
火竜の鼻先まで飛び上がったサイトは、勢い良くデルフリンガーを振り下ろすが
「なっ！？」
「相棒っ反射魔法（カウンター）だっ！」
火竜に届かず、弾かれる。
「さよならだ、元ガンダールヴ」
ロープの人物がそう言うと、火竜の顎が開かれる。
「いけねぇっ！地下水っ！」
「わかってる兄貴っ！！」
両剣の叫びと共に放たれる、灼熱のブレス。
「――――――っ！？」
よける間もなく、直撃する姿を無感情に見ながら

「お前が、真にガンダールヴなのなら死にはしまい。これからの劇には貴様が必要だ。我が主の期待に答えるのを待ってるぞ」

そう言い残し、火竜と共に空を駆け抜けていった。

◆

「何とか生き延びたみてぇだな」

「直撃は避けた。けど兄貴」

声が聞こえる。

体中が痛くて内容がわかんねぇ。

「ひでぇ傷だな相棒」

「全身大火傷だ。まぁ命に別状はないから大丈夫さ旦那」

歴史の修正。

元ガンダールヴ。

知っていやがった。

この世界が狂ってる事に。

「おっ衛士達が来たみたいだ」

「これで一応安心だな」

あの悲劇は防げたと思っていた。

思ってたのに！
暖かい眼差しで婚姻を勧めてくれた、親と慕う人達。
なんでだよ。ちくしょう。何が伝説だ。
手も足も出なかったじゃねぇか！
ぐるぐると渦を巻く思考の波に飲まれ、サイトはやがて気を失った。
頬には一筋の涙を伝たわせて。

第4話

慌ただしく駆け抜けるいくつもの足音が聞こえる。
あれから3日が過ぎたらしい。
倒れている内に運ばれたのだろう王宮の自室で目を覚ますと3日が過ぎており、傷も癒されていた。
王の側使えの医師によると、やはり夫人の精神は狂い完治は絶望らしい。
救いなのはシャルルが一命を留めたとの事。
一時は危なかったらしいが、今は持ち直し深い眠りについていると言う。
だが・・・・。

「シャルロット・・・」

目を覚ました時に、写り込んだのは絶望と憎悪を抱えた彼女の瞳。

『役立たずっ！何が伝説よっ！貴方が変わりになればよかったのにっ！！！』

心に刺さる批判。
当然だ。
彼女は家族を愛していた。英雄譚が好きな彼女は、俺を伝説の使い魔と知り英雄視していた。

「裏切られたと思ったんだろうな」

返す言葉がねぇよ。

シャルロットの悲痛な叫びを思い出し涙が出る。

「・・・ちくしょう」

彼の慟哭を扉の外で聞くイザベラ。
彼女にはかける言葉が見つからなかった。

◆

サイトが目醒めてから、更に2日が過ぎた。
例の火竜は巣穴に居なく、捜査が難航していたが今朝方発見されたと報告があり、火竜討伐の為の会議が行われていた。

「今すぐ、軍を編成して討伐に向かうべきです！」

「そう簡単に編成などできんよ、時間がかかる！」

「火竜を倒したからと言って精神の狂いが直るとは思えん！」

「臆病風に吹かれましたかっ伯爵！」

（無駄な言い合いをしおって！）

もう時間は昼を回っている。
朝からののしり合う、重鎮達を見渡しジョゼフは溜め息をつく。
皆火竜が恐ろしいのだ。今までも何もしなかったわけではない。
しかし数百に及ぶ衛士隊を派遣したが過去に何度か全滅している。
一個師団（この世界、ガリアの一個師団は二千から三千）率いようとも、火竜を滅することはおろか、逆に全滅の憂き目にあってしまうかもと彼らは、どうしても尻込みしてしまう。

（気持ちはわからんでもないがな）

それに、あの古代種を相手取るなら国軍の出動が必要で、ジョゼフ直轄の騎士団では無理なのだ。時間がかかるのは仕方がない。

（仕方がないが・・・）

重鎮達の言い合いに区切りをつけ動こうとした時

「た、大変です！イザベラ姫殿下とシャルロット様がっ！！！」

会議室に走り込んできた衛兵が、とんでもない報告を抱えてきた。

「あのじゃじゃ馬娘共っ！」

報告を聞き、顔色を変えたジョゼフは怒りにまかせ卓台を叩きつけて叫んだ。

「一刻の猶予もないっ！東、西の花壇騎士団を先行させろ！リーング伯爵は、一個師団編成して後を追えっ！！！」

「「「「はっ！」」」」

自身も行きたいが、立場上動けない。

またこれ以上人員を割くことが出来ないジョゼフは、信じてもいない神に祈るしかなかった。

（始祖よ、何でもしてやる！だから俺の宝をこれ以上奪うなっ！）

◆

時は数刻程遡る。
火竜発見の報を受け、討伐について行こうと、今か今かと待ちわびていたシャルロットとそれに付き添うイザベラ。
しかし明け方から会議を行っているというのに、なかなか結果が出ないことに業を煮やしたシャルロットは、復讐と母を治す薬を求めて発見場所に向かおうと行動を起こした。
さすがに無謀な行為に、イザベラは窘めたのだが聞く耳もたず

「仕方ないね。あたしも行ってあげるよ」

可愛い妹を見捨てるわけには行かず、仕切りに感謝するシャルロットと共に書き置きを残して、こっそりと宮殿を抜け出した。
子供故に考えが足りずどうなるかも知らずに。

失敬した風竜を使い、暫くして件の場所に辿り着く。風竜は火竜に脅えたのかさっさと薄情にも立ち去り、それを諦めの表情で見やりながら歩みを進める。
あたり一面火竜のせいか、火山のせいか、むっとする熱気に覆われ植物が殆ど生えていない禿げ山。
岩肌剥き出しの山道を歩き巣穴に辿り着く。

「結局元の巣穴に戻ってたんだね。ここ数日どこに行ってたんだか」

ねぇと横のシャルロットに話しかけるも、返答はない。
感情を消し去り能面のような顔で巣穴に入る。

（仕方ないね。あたしだって同じ目に合えばああなっちまう）

無表情の中に隠しきれない憎しみが光る瞳を見ながらイザベラは、その小さな体に気合いを入れる。

――同刻。

サイトも手掛かりを求め打って出ようと研究室での準備を終え、飛行型ガーゴイルを浮かべていると、ロープ姿が現れた。

「てめぇっ！」

ギリッと奥歯を噛み締め睨み付けるサイトに、楽しげに話しかける。

「まだグズグズしてたのか？お前の可愛いお姫様達はとっくに向かったと言うのに」

「なんだとっ！？」

脳裏に浮かぶは二人の愛する妹姫。

「早く行かないと命の保証はない。まぁ劇の参加の褒美として火竜を倒せば今回はこれ以上手出ししないと約束しよう」

「ふざけやがって。何様のつもりだっ！」

叫ぶサイトを気にした様子もなく話を続ける。

「あの火竜は我が秘術によって、強化されている。軍すら手が出なかった古代竜。しかも更に強化されたあれを貴様独りで倒せるか見ものだ」

「やはりおめぇが、火竜を操ってたのか？いくら気性の荒いアイツでもなにもなしで暴れるはずがねぇからな」

デルフリンガーの言葉にふっと笑いを零すと、その姿を霞ませていく。

「待てっ！まだ聞きたいことがっ！！」

「さぁっ喜劇の舞台に立て、ヒラガサイト！！素晴らしい結果を期待しているぞ！！」

サイトの叫び虚しく、その姿を完全に消し去った。

暫く消えた空間を睨み付け、ガーゴイルに飛び乗る。

「旦那、わかってると思うけど魔法は余程の事がない限り無しだぜ」

「ああ」

「相棒の本職は剣士だかんね。なるべく力は温存すべきだ。じゃないと奥の手まで保たないね」

「わかってる」

怒りを押し殺した表情で、チラリと両手を見る。

そこに刻まれたモノを見ながら

「間に合ってくれ！！」

守るべき少女達の元へ急ぐべく、空を駆け抜けていった。

第5話

勇者に憧れていた。
いえ、勇者に助けられるお姫様に憧れていた。
わたしは、オルレアン公シャルルの娘。
身分で言えば、お姫様。
幼き頃より母様に聞かせていただいていた、英雄譚。
―イーヴァルディの勇者―
その勇者に出会えるの夢見ていた。
わたしだけでは無く、同じくお話が好きだった姉様もだけど。
そして、三年前。
勇者はわたし達の前に現れた。
想像していたより、子供でお馬鹿で少しエッチだけど、優しくて暖かくて強くて・・・色んなお話をしてくれるわたし達の、わたしだけの勇者様に。

◆

怖い。
ただただ怖い。
甘く見ていた。
憎しみや焦りで理解していなかった。
こんなモノに勝てるはずがない。わたし達子供二人で勝てるくらいなら、国軍は敗れたりしない。
辿り着いた巣穴の奥。
そこに広がる広場に佇む古代竜。
その巨大な肉体を苦にしないほどの広場で、わたし達は倒れている。
何かされたわけではない。

竜の叫び声一つで、あれだけあった憎しみが消し飛んだ。
［ドラゴン・ハウリング］
力有る竜の叫び声は、力弱き者には即死の効果があると言われている。
死ななかったのが奇跡だろう。
恐怖と情けなさで頬を伝う涙を拭う事も出来ず、震えるのみ。

（恐い怖いこわいコワイ）

三文字が頭を駆け巡る。恐怖に震えながら、しかし姉様はわたしに逃げろと言い続ける。

（バカだった。わたしのせいで姉様まで危険に晒した）

どうする気だろう？
全てを溶かす灼熱のブレスで死ぬのか？
その巨大で鋭い牙や爪で引き裂かれるのだろうか？
それとも、その巨大な体で踏み潰されるのか？
脳裏によぎるは絶対的な死、それのみ。

（助けて。誰か助けて）

来るはずも無い助けに呼び掛ける。
軍が来るのはまだ先だろう。
なら可能性があるのは？

（サイト・・・兄様）

それこそ来る筈がない。あれほど酷いことを言ったのだ。
眠りから覚めた彼に、心配したなどの労いの言葉もかけずにいきな

り罵倒したのだ。
あの怪我を見れば、どれほど頑張ったのかわかっていたはず。
まだ１４才の少年が、一軍率いても倒せない火竜に勝てるわけなどないのだ。
ただわたしが勝手に勇者と見ていただけ。
そんな身勝手なわたしを、しかも傷が癒えたとは言えあれだけの大怪我だ。
まだ安静にしなければならない。
でも――。
火竜がゆっくりと口を開き、胸が膨らむのがわかる。
後、僅かでブレスで焼き殺される。
姉様はまだ、わたしに逃げろと言ってくれている。
巻き込んだわたしを責めずに。
あぁ神さま・・・せめて姉様だけでも。
神さま・・・勇者様・・・。
助けて・・・。

竜の喉奥に炎が見え、そしてそれが吐き出され――――。

いや助けて、助けて！！

「助けてっ！！兄様ぁぁぁっっ！！！」

「させねぇっ！！」

死を覚悟して叫んだわたしの前に、勇者様が現れた。

◆

「デルフっ！」

「おうよっ！」

イザベラやシャルロットに向けて放たれたブレス。
それに辛うじて間に合ったサイトは、倒れ伏す二人の前に立ちはだかるとデルフリンガーを振りかぶった。

「ぐぐぐぐぅっ！！」

「耐えろ相棒っ！！」

凄まじい圧力を体に感じるが、負けるわけには行かない。

「うおぉぉぉぉっ―！！」

「よっしゃ！受けきったぜ旦那！思った通りだ！」

事前に地下水が言っていたセリフ。
火竜のブレスは魔法の一種なのではないか？
あの時、オルレアン公の屋敷にてブレスを浴びた時に感じたらしい。

（一か八かだったけど！）

「うらぁっっ！！」

ブレスを受けきり、火竜の足元を切りつけるが跳ね返される。

「カウンターかよっ！」

「相棒っヤツを引き付けて姫さん達から離れるんだっ！！」

「わかってるっ！！」

すく近くに乗り捨てていたガーゴイルをミョズニトニルンの力で呼び寄せると、乗り移り火竜の鼻先で剣を振るう。

「姫殿下！お二人は早く離れて！！」

元北花壇騎士の名残か、幾分丁寧に地下水が二人に叫ぶ。

「わ、わかったよ。シャルロットっ！！」

精神が持ち直したのか、サイトの登場で惚けていたイザベラだがすぐさま行動に移る。

「兄様」

あきらめていた、でも本当は信じていた兄と敬愛するサイトの登場に、イザベラ以上に呆けるシャルロット。

イザベラが動かそうとするが、二人とも心身ともに疲れ果ている為か動かない。

「ぐわっ！」

引きつける作戦は成功してはいるが、火竜の圧力や振るわれる腕に

先程から、何度も危機を迎えている。

「あのロープ野郎に、薬盛られているせいか、正気じゃないさね。それが救いか」

デルフリンガーの言葉に答えたくとも

「くっ！」

こちらが切りつけるより、あちらの攻撃を避ける方が多くなり難しい。

「相棒、なるべくブレスは撃たせるな！そう何度も無理だっ！」

如何にパワーアップしたデルフリンガーとは言え厳しいらしい。
その言葉を聞きながら、シャルロット達に視線をやるとまだグズグズとしている。

（くそっ何やってんだよっ！）

腰でも抜けたのかと判断すると

「地下水っ！！」

「任せな旦那っ！！」

シャルロット達の方に、地下水を投げ、投擲された地下水がイザベラのすぐ横の地面に突き刺さる。

「姫殿下っ！！シャルロット様に俺をっ！！」

その言葉で、地下水の力を理解しているイザベラは手早くシャルロットに地下水を握らせ

「では参りましょう」

地下水に操られたシャルロットが立ち上がり、イザベラを支える。

「・・・サイト」

懸命に攻撃をいなすサイトを心配げに見つめ、イザベラはシャルロットと共に、広場を出て巣穴の脱出に歩みを速めた。

「うらぁっっ！！」

「ダメだ相棒っ！！カウンターは超えられねぇっ！！」

「ちくしょうっ！！」

何度攻撃しても、先住魔法の反射に防がれる剣戟。

「反則過ぎるだろっ！！せめて解除の魔法が使えたらっ！！」

「どの道あの巨体に効く攻撃なんか無理だけどね」

やる気を削ぐデルフリンガーの言葉に、しかし確かにと頷く。
奥の手は用意してある。だけど、まだ使用するには早い。
完全なタイミングでないと意味がない。
タイミングが合っても、効果があるかはわからないのだ。無駄打ち

は出来ない。

「相棒っ！！」

「なっ！？」

余計な思考がいけなかったのか、死角から来る攻撃に避けきれなかった。

振るわれる竜の尾。

尻尾とは言えその体躯に見合った質量がサイトに襲い掛かる。

ズドンっっと体が破裂するかの衝撃が体中を巡り、サイトを吹き飛ばす。

「ぐはぁぁぁっっ！！」

直撃はしなかった。

だがしかし殺しきれない威力に体が壊れるのを感じた。

血飛沫を上げ、そのまま天井近く吹き飛ばされるサイト。

その姿を狂い濁った瞳で見ながら次の攻撃に移る。

「いけねぇっ！！ありゃ防げねぇっ！！」

デルフリンガーの声に、未だ宙を浮くサイトは霞む目で火竜を見る。

大きく口を開ける火竜に、先程のブレスとは比較にならない程の光量が溢れ出す。

「体が動かねぇよ。デルフ」

「残念無念さよならだっ！！」

最期かも知れないのに、軽く言うデルフに文句を言う間もなく
ゴオォウっと吐き出されるブレス。
もはや炎などと呼べない、極大の光線がサイトを襲い天井を突き抜けた。

◆

「・・・あれは？」

火竜の巣穴へと急ぎ先行していた花壇騎士団。
東薔薇騎士団の団長バッソ・カステルモールは、天高く突き抜ける光線を見つけ、遠目ながら山が崩れていくのがわかった。

「くっ、シャルロット様っ！！」

焦りを覚えたカステルモールは、このままでは間に合わないと判断し、火山から逃げ出し合流した風竜に跨ると一人先行する事にした。

「先に行くっ！！お前たちもなるべく早く来いっ！！」

部下達に命じながら、駆け抜ける。

（無事でいて下さいっ！！）

流行る気持ちを抑えきれない彼は、崩れていく山を見つめながら進むのだった。

◆

巣穴を抜け出て山道を駆け抜けようとした瞬間、轟音と共に光が天高く突き抜ける。
慌てて仰ぎ見たイザベラの瞳に、山頂が崩れていくのが写り込む。

「なっ・・・！？」

あまりの光景に絶句する彼女をよそに、何かを見つけたのか地下水に操られたシャルロットがレビテーションを唱えた。

「次はなんだいっ！？」

何が起きたか把握できないイザベラ。
しかしすぐに理解する。

「サイト」

空よりゆっくりと落ちてくるその姿を見て、頬を緩めるも

「っっ！？」

地面に辿り着いた彼の姿を見て絶句する。

「いやぁ何とかなったな相棒。さすが伝説」

「うるせ、どう見ても死にかけだろ」

体のあちこちから、血が溢れている。
火傷が体を覆っている筈なのに止まらない出血が、破れて面積の少なくなった服に染み込み赤く染め上げていた。
よく見ると背中や腕、足から骨が突き出し左目も潰れて、左耳が削げ落ちている。
動けるのが、否、生きているのが不思議な程の重傷にイザベラは危うく気を失いそうになった。

「相棒、来なすったぜ。どうする？」

視線を上げると、崩れた山頂から悠然と姿を現す火竜。
ゆっくりと此方に向かいくる姿に

「どうしようか？」

情けない声を出すサイト。
飛行型ガーゴイルは無く、体はボロボロ。
救いは知性が狂わされている事と、どうやら地面に降り立ち攻撃しようとする雰囲気くらい。

「今度こそお手上げかね？」

諦めたかのようなデルフの声を聞いたのか

「どう、して・・・？」

か弱く、危うく聞き逃しそうな声に振り向く。

「・・・シャルロット」

地下水が解放したのか、涙を浮かべるシャルロット。

「あんなに酷い事言ったのに、そんなに傷付いてまでどうして」

わかってる。聞かなくても彼はそう言う人間だと言う事を。

「辛くないの？痛くないの？恐くないの？」

しかし言葉が止まらない。

彼の言葉で知りたい。

今の状況で聞くのは愚かな事、しかし思いが・・・勝手な想いが止まらない。

「辛いよ。痛いしすげぇコワイ。今だって震えが止まらねぇ」

焼きただれ、潰れた左目を此方に向けて話すサイト。

「俺は、ガンダールヴじゃねぇから心の震えで強くなったり出来ねぇ。ガンダールヴじゃないから勇気なんか溢れ出ねぇ」

でもなと、言葉を区切り一呼吸置くサイトにシャルロットは続きを待つ。

「ここで逃げたら、ガンダールヴじゃねぇ俺自身のちっぽけな勇気が許さないんだよっ！！俺の心が前に進めと叫んでるんだっ！！」

その姿に、母が呼んでくれた物語の主人公が重なるように見えたシャルロット。

知らずと頬が熱を持つ。

「シャルロット様ぁっっ！！」

そんな彼等を救う一瞬の間。
辿り着いたカステモールが火竜に向けて、攻撃を仕掛けたそれに

「相棒っ！！」

「わかってるっ！！」

注意がそれたここが最後のチャンスだっ！！
壊れかけの体に鞭打ち左手を掲げる。

「うぉぉぉっっ！！」

左手の甲から光が溢れる。
現れるはガンダールヴのルーン。

「ガンダールヴ偽、発動っ！！」

在りし日のように体が軽くなる。

（少しでも長く保ってくれっ！！）

未だ体にルーンを刻みつけるのは研究段階。
しかも伝説のルーンは体にかかる負担と発動時間や効力の低さ、そして大量の精神力の消費の為に危険と判断して研究を止めていたのを、今回切り札として用いたのだ。
死体同然の体とは思えない速度で火竜に突進し、舞い上がる。

「イーヴァルディの勇者」

光る左手を見つめシャルロットが熱いため息を吐く。
そんなシャルロットの見つめる先で、サイトは火竜の鼻先まで飛び上がり、同時に限界を迎えたのか左手の甲が弾け飛ぶ。

「ぐぅぅっっ！！まだだぁっっ！！」

目の前に飛び出たと言うのに火竜は気付かない。狂わされてるせいで助かると、痛みを我慢し右手を掲げる。

「ヴィンダールヴ偽、発動っ！！」

僅か数秒、火竜の意識を乗っとったサイト。
カウンターが解除され、それと共に右手の甲が弾け飛ぶ。

「ぐわぁっっっ！！」

痛みに限界を感じながら、しかし休むことなど有り得ないし許されない。

意識を取り戻し、サイトに気付き攻撃を仕掛けようとする火竜に

「遅せぇぇぇっっ！！」

握力が無くなり、片手で支えるのが困難なデルフリンガーを血まみれの両手で振りかぶり

「俺の勝ちだぁっっ！！」

叫びと共に、最後のルーンが輝きを帯びる。
額に刻まれたミョズニトニルンのルーン。
あらゆるマジックアイテムを操るそれは、デルフリンガーが火竜の攻撃から力を蓄え、またサイト自身の精神力を光の攻撃へと具現化した。

振り抜くと同時に、光刃が火竜の頭部を吹き飛ばす。
最高強度の竜の鱗がなんの役にもたたない凄まじい切れ味の光刃は、勢いを衰えさせることなく彼方まで飛び去っていく。

その光景を唖然と見つめていたカステルモールだが、慌てて風竜を飛ばすと落下するサイトを受け止め、安堵のため息をついたのだった。

イーヴァルディの勇者。
シャルロットが呟いた言葉にイザベラもそれを意識する。
冗談に思える程のサイトの戦いに、しかし現実と受け止めるとシャルロットと共にサイトに駆け寄っていく。

「サイトっ！！」

カステルモールに抱えられるその姿は、目を背けたくなる程の筈だが、しかしイザベラもシャルロットもその姿が何より格好良く見えて・・・。
今まで感じたことない激しい胸の動機。
しかし、どこか心地よいその高鳴りに幸福感が溢れ出し、愛しげにサイトを見つめる。
それが彼女達にとって、大好きな兄から愛する男へと変化し、真に意識した瞬間だった。

第5話（後書き）

カステルモールは原作より、団長になるのが早くなっています。

第6話

「うーん。痛い苦しい死んじゃう。てかマジ死ぬ。そして暇」

激闘を制し、早２０日。水の魔法や秘薬ではなかなか完治せず、闘病生活を送っていた。
酷すぎた傷自体も完治が遅れる原因なのだが、最大の原因は切り札にと刻んだルーンの後遺症だった。
傷の治りを遅くし、かつ精神力が枯渇。
心の力がゼロなのに、体が生きているなんて不思議。ミョズニトニルンのルーンのお陰かな、などとお気楽に考えていたサイトだが、このままでは死ぬかも知れないと判断し以前造っていた秘薬を使用したのが１０日前。
なかなか治らない体と心に、失敗した？でもマシになったしなぁと考えながら、見舞いに来たイザベラやシャルロットの言葉を思い出す。
あの後大騒ぎになったらしい。
いくつか指示した後すぐに気絶したのでしらなかったが、当然だ。
あの古代種の竜をたった一人で倒したのだ。
正に勇者の再来と国民総出で、喜んだらしい。
面会謝絶していたので、あまり実感はないのだが、目鼻の効く貴族などは毎日のように面会に訪れたみたいだ。
まぁ、その反対に更に嫌みを言う奴もいたみたいだけど。

「勇者・・・英雄か。ふへへ」

久々に持病が再発する。
素敵サイト様！たったお一人であの竜を倒すなんて！
いやいや、皆への愛があったおかげだヨ。

キャーっ！！私ずっと前からサイト様の事、勇者様みたいだと思ってたの！
ズルい、あたしだって！
待って、わたしの方が！
待ちたまえ君達。僕は皆の勇者だヨ。
キャーーーっ！！

「ふへへ」

巨乳の美少女達にチヤホヤされる妄想をするサイト。
同刻――桃色の髪をした少女が、何故かイラッとしたのは誰も知らない。
とにかく妄想に浸るサイトに切なげな声で

「後遺症が残っちまったか」

「哀れだぜ旦那」

唯一常の立ち入りを許されている相棒達のセリフは、意図的にスルーするサイトだった。

◆

豪奢な室内。
王に相応しき調度品の数々が置かれたジョゼフ個人の部屋。

「シャルルよ。此度の一件どう見る？」

火竜騒ぎが落ち着きを見せ、シャルルが復帰したのを見計らい先延

ばしにしていた事件について話し合っていた。
「わからない。私はサイト君が現れて直ぐに気絶したから」
ただ、と一旦区切りワインで喉を潤すと
「何かを起こそうとしているのは確かだ。もしかしたら」
「最近騒がしい小国の連中か」
シャルルの言葉に続けるジョゼフ。
「そうかも知れない。ただわからないことが多すぎる。彼等小国が力を付けてもガリアはおろか、トリステインにも勝てない筈だが」
「それこそ、何十もの国を併合して力を付けるか、どこかの国が裏で操るぐらいしか思いつかんな」
答えが出ない、出るはずもない2人はとりあえず監視体制の再強化をすると言う事で話を終わらすと、次にサイトの話題に移る。
「さて、図らずも多大な功績を挙げてくれたのだが」
「私たちにとっては非常に嬉しいね」
先の功績に付いて話し合う。
本来なら他の重鎮達も交えて、サイトの功績について話し合わなければならないのだが、ケチを付けられないように事前に2人で行う。
「シュヴァリエは確実にくれてやっても良いのだが」

「理想とする身分には遙かに遠いね。ただ安易に貴族の身分を与えても、周りが納得しない」

「全くくだらんことだ。改革は進んでいるが、意識改革が完全に行えているわけではないからな」

ハルケギニア六千年の歴史は重い。
いかにジョゼフ肝煎りのサイトでも、急激な平民の出世は今まで好意的だった貴族にすら反感を買うかもしれない。

「先の火竜だけじゃなく、今までの功績を考えたら、シュヴァリエと合わせて男爵くらいにはしても良いんだけどね。一応対外的にはメイジとなっているし」

「ふむ、男爵か。それで進めてみるか。欲を言えばもっと上なのだがな」

でないと結婚出来まい。と続けるジョゼフに

「まぁこれから先に期待しよう兄さん」

本人預かり知らない所で交わされる密談。
しかし、このあと2人にとっての願いが叶うネタが転がり込み大いに喜ぶ事になるのを今は知らないでいた。

◆

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

ジョゼフ達の密談の翌日。
体調が良くなり、起き上がったサイトは何故か慌てふためくデルフリンガーと地下水に進められ、部屋の片隅にある鏡を覗いていた。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

痛い沈黙が場を支配する。
ナニコレ、ドナタデスカアナタ。
ワタシキッスイノニホンジンネ。
コンナノアリエナイネ。
現実逃避を続けるサイトに、デルフが重い口を開く。

「いやぁ似合ってると思うよ相棒」

「そうそう、生まれ変わったかのようだ」

地下水も追随し言う言葉に、ようやく再起動したサイトは

「だれだよお前っ！！？」

「「相棒（旦那）だよっ！！」」

鏡に映る自身の姿に、叫ぶサイトに素早く突っ込みを入れる金属達だった。

映る姿は蒼。

髪や瞳が、着色では決して付かない鮮やかな色を放っている。

そう、まるでガリア王家直系のように。

「薬か・・・。あの秘薬のせいか」

重い浮かぶは、１０日程前に飲んだ秘薬。

ガリア直系――始祖の血や魔力はなんか凄い秘薬になるんじゃね？

みたいなノリで皆から摂取した血液や魔力をルーンの力を用いて造り上げた秘薬。

もちろん色んな人間に協力・・・と言う名の人体実験では、精神力の増幅や身体能力の向上、高い治癒力などと、今までの秘薬とは何段階も上の成果を上げ問題ないのは確認済みであったのだ。

大丈夫な筈だったのだけど、何で？

「うーん。異世界人には効果が違った？なわけないか」

じゃミョズニトニルンのルーンのせいか？

それともガンダールヴ偽やヴィンダールヴ偽のせいか？

「わからん。とりあえず血液採取するか」

思い悩みながら、研究室に歩みを進めるサイト。

それを面白そうに見つめる、爵位の件を伝えるために何時の間にかいたジョゼフとシャルルに気付かないサイトだった。

「何か愉快な匂いがするな」
嬉しそうに、サイトが入った部屋に続くジョゼフに、溜め息をつきながらシャルルも入り、見られたくなかったサイトが絶叫したのはお約束である。

◆

「で、結局なんなのだそれは？」
研究室で、僅かなゴタゴタがあったものの結果を待っていたジョゼフは問い掛ける。
「簡単に、言いますとガリア王家の力を得てしまいました」
ジョゼフ相手に普段なら使わない敬語で答える。
怖いのだ。
そりぁあ怖くもなる。
誰もが羨む高貴な力を、単なる平民の少年が得たのだ。
やべぇ、俺死刑？どどどうしよっ！！
顔色を悪くしながら、ジョゼフの様子をうかがう。
笑ってる。
愉快痛快ネタ出来たみたいな嬉しそうな顔だ。
ああ、こういう奴だったよなと幾分気が楽になりっていると
「よくわからないんだが、つまり王家の血筋に連なったのかい？」

ジョゼフより早く、シャルルが聞く。

「いえ、正式にはそうじゃないんだけど」

どう言ったら良いのかなとしばらく言葉を選び

「血筋・・・ガリア王家やそれに連なる血は得てはいないんだよ。そんな事は神にも不可能だし、もしそんな事があれば、俺は平賀才人ではなくっなってしまう」

以前に遺伝子の話はした事があるため、体を創る設計図がガリアのモノに書き換えられたのなら、平賀才人と言う日本人は死に、まったくの別人となるのだろうとジョゼフとシャルルは考える。

「わかりやすく言うと、ガリア王家としての魔力や能力そのものだけを取り入れてしまったみたいだ」

故に、ガリアの象徴たる蒼まで手に入れしまったと答える。
黒髪黒目は優性遺伝の為、このような変色は地球人の遺伝子が異常を起こさなければありえないのだが『ガリアの蒼の能力』を得てしまった平賀才人と言う日本人は、その存在そのままに蒼になったのだろうと踏んでいる。

「まぁ詳しく話せば長くなるんで、そう理解して欲しいんだけど」

「ふむ。要はパチモンか」

「パチモンて。いやそうだけど、日本人と言うのが違うだけで、それ意外はガリアになったんだけど」

「それは何か不都合を起こすのかい？」

「いやなんにも。ただ髪と目の色が変わっただけだし。しいて言えば生まれるだろう子供にも現れちゃうことかな？」

それは大問題なんじゃないかとシャルルは思うも、こちらとしては都合が良い。

ジョゼフに視線を向けるとニヤリと笑い頷く。

（兄さん、何か思い付いたみたいだな）

さて、どうする気だと考えているとジョゼフが口を開いた。

「サイトよ。貴様に今までの功績を踏まえ、幾つか褒美をくれてやる。まず一つ目はシュヴァリエの位だ」

「へっ？」

ジョゼフの言葉に、間の抜けた声で返すサイト。

きょとんとした彼に更に続ける。

「爵位はそれ以上やれんが、その代わりその姿を存分に利用出来るよう名と勇者に相応しい力を揮う場所もくれてやる」

楽しげに語るジョゼフ。

これほどの好機を逃す手はない。

反感を買うだろうと、二の足を踏んでいた領地持ちの身分や軍での高い地位を与えるより、余程やりやすい事を思い付き言う。

「前王。親父殿には実は隠し子がいた。我ら二兄弟の腹違いのな。

その母は東方出の平民でヒラガの姓を名乗っていたらしい。そしてその子供は庶子であるために、また権力争いから逃れるために隠されていた。せめてもの償いと、本来なら与えないはずのヒラガの姓とは別に平民とは言え立派な名を与えられてな」

何か物語を語るかのように朗々と話だす。
いきなりの話の展開について行けず
こいつなに言ってんの？と首を傾げるサイト。

「その庶子の子にもやがて子が、元気な男の子が産まれるも子を残して死んでしまう。それを知り哀れに思った余は、家族としての情により数年前にある少年を王宮に招き入れた」

あれれ？何か嫌な予感がする。
ジワリと冷や汗が浮かぶサイト。
その様子を笑いをこらえてシャルルは見ながら、なる程その手があるかと兄の機転に感心する。

「権力争いの愚かさを親から聞かされていた少年は、わざと髪と瞳の色を魔法で黒く染めていたのだが今までのガリアに対する貢献と、この度の古代竜の討伐の褒美として心優しき余は少年の正体を世間に知らしめる事にした」

「ちょっと待てっ！！何か嫌な予感がするんだけどっ！？」

先が何となく理解出来てしまったサイトは慌てて遮ろうとするが、ノリノリなジョゼフは劇のクライマックスとばかりに言い放つ。

「貴様の名は、サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ・イーヴァルディ！！余の護剣となる《王の剣》にして、王位継承権第三位のイザ

ベラやシャルロットの従兄弟だっ！！」

「何だってーーっ！！？」

ジョゼフの言葉に絶叫するサイト。

「何だこの展開はっ！！しかもヒラガじゃなくて、イーヴァルディがラストネームって！！てかイーヴァルディって何だよっ！！」

「知らんのか？有名だぞ？」

「シャルロットの好きな話の奴だろっ！！俺が言いたいのはそうじゃねぇっ！！」

必死なサイトに余裕なジョゼフ。

（だがこれは確かにいい方法だ）

そんな二人を見ながらシャルルは思う。

平民に高位の爵位や軍の地位を与えれば反感を買う。
実は高貴な出と言っても、自分達の居場所を失う事を恐れる貴族連中はいい顔はしないだろう。
ならばいっそのこと、世間に知られていない王族とし、実情不明な《王の剣》と言うでっち上げた場所を与えれば良い。
幸いにして、サイトが使い魔と言う事は一部を除いて知られてはいない。
そもそも平民でありながら厚遇どころか、ジョゼフやシャルルに息子のような愛されていたのは良く知られている。
その能力も相俟って受け入れられるだろう。それに、幸いにも前王

の私生活まで詳しく知る者は、高齢や粛正などで今はいなく、王権に絡む公爵家もない。
なかなかの名案に

「しかし、まさかイーヴァルディとはね」

平民だからと与えられたと嘘ぶいた、あまりに有名な平民の勇者の名前。
しかし、ガリアの勇者にはこれ以上なく相応しい名にシャルルは、シャルロットは喜ぶだろうなと思うのだった。

第7話

ガリア国家騎士団――王家直属の王軍であるそれらは、ガリア花壇騎士団と言う方が世間では知られているだろう。
ヴェルサルテイル宮殿に点在する花壇を、王家を守護する騎士になぞらえたもので、それぞれ東西南北の名を関する部隊が存在する。
東薔薇騎士団。
南薔薇騎士団。
西百合騎士団。
北花壇騎士団。
所属する事が誉とされる各騎士団だが、北花壇騎士団は他の三騎士団とは少々、いや大きく役割が異なる。
そもそも、公式的には存在していない事になっている所謂公然の秘密と言う騎士団の仕事は、多種多様である。
魔獣幻獣退治から要人警護から諜報や暗殺。
果ては失せ物探しから痴話喧嘩の仲裁までである。まるで何でも屋のような存在だが、その実態は真なるガリア王家直属実行部隊であり、団員一人一人の実力は桁外れに高い。
また、その特殊性故に、各団員は互いの素性を知らない事が多い。
その騎士団に最近二人の少女が入団した。
言わずとしれたガリアの姫、イザベラとシャルロットだ。
あの火竜の事件の直後、何か思うところがあったのか北花壇騎士団に所属してから、早くも8ヶ月が経過していた。
イザベラは魔法の才が乏しく実践向きではなかったが、実務業務力が高く、その内政力を評価されジョゼフの替わりに団長になり、またシャルロットは父譲りの魔法の才を開花させ、トライアングルクラスにまで及んでいた。
ただ、母の回復が絶望的と見なされた時から快活で甘えただった性格が影を潜め始め、また国の為とは言えど過酷な任務を経験する内

に更に感情を面に出さなくなっていた。
精神的に痛い任務が多い北花壇騎士団において、優しすぎるシャルロットには、感情を押し殺さなければ辛かったのだろう。
何かと理由を付けて同行しようとするサイトに、シャルロットは首を縦には振らず一人で行う。
将来サイトの隣に立ち《王の剣》で共に働きたい為に力を付けようしているシャルロットだったのだが、理由を知らないサイトはわからない。
兎に角、シャルロットの心にトドメとなったのが吸血鬼退治。
任務遂行後に、珍しく感情を露わにしてサイトに会いに来た彼女は一言

「友達を殺した」

と呟いて、泣いていたのをサイトは忘れられない。
友達とは退治すべき対象の吸血鬼だった。
これを聞いた時、サイトは無理矢理にでも任務に動向するべきだったと深く後悔した。
そんなシャルロット――ガリア北花壇騎士団第七位、七号タバサとイザベラが勤める小宮【プチ・トロワ】の広場にてサイトは地下水にバカにされていた。

「魔法の才能低すぎだぜ旦那。イザベラ姫殿下にバカにされるほどなんてさ」

「うっせ」

地下水の指摘にふてくされるサイト。
せっかく力を手に入れて、勇んで杖と契約し魔法の訓練をするも全然ダメ。

ドットの下の下の下。
これがサイトのメイジとしての力だった。

「力を継承したと言っても、旦那の体が変化したのは髪と目の色だけだからな。メイジとしての血脈じゃないからいくら力があっても上手く鍵が開かないみたいだな」

地下水の言葉にうなだれるサイト。
一時は諦めていた魔法戦士。
それが叶うと思っていただけに非常にショックだった。

「まぁ相棒の本職はあくまで剣士だかんね。魔法を使う戦い方は学んでねぇし、下手に癖付くより諦めがついて良いんでねぇか？」

デルフリンガーの微妙な慰めに
まぁそうだけどと返す。実際、魔法が使いたければ地下水を使えば良いだけなのだ。気にしても仕方ないと意識を切り替える。
それを感じたのだろう地下水が話を変えてきた。

「で、旦那はいつまでもヒラガサイトでいるんだ？」

「いつまでって、別に考えてねぇよ。俺が平賀才人と名乗っても、公式文書にはサイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ・イーヴァルディになってるし」

あの時、突如与えられたら名と身分は今考えると妥当だと思うサイト。
下手な混乱を起こすくらいなら、如何に継承権三位と言えども実質無位無官のような立場に置く方が正解なのだ。
ただ、さすがに対外的に名を広めるのは止めてくれと泣いて懇願し、

内外の国にはサイトの名ではなく、イーヴァルディと名乗る王家の庶子の勇者が現れたと広まっているので助かっている。
国内においても、特に顔見せを行っていないサイトを知るものは少なく、ただ単に平民や貴族からガリアの剣や勇者イーヴァルディと謳われているだけなので対した被害も無く過ごせていた。

「だいたい《王の剣》って組織作ったのに、俺しかいねぇし。何もしてねぇし」

なのに、《王の剣》って名前だけは有名になったんだよな。《王の剣》＝俺になってるし。

「まぁ相棒も今や【王剣】の二つ名持ちだから良いじゃねぇかよ」

デルフリンガーの言葉に

「ただ略しただけの安直な名前だけどな」

と言う地下水。
因みに、イザベラやシャルロット―タバサは【勇者】とサイトを呼んでいる。

そんな会話をしていると、サイトを呼ぶイザベラの声が聞こえてきた。
何か用かとイザベラに近寄ると

「ああ、使いの者が来てね。あんたは至急王城に出向くようにだとさ」

「なんかあったのか？」

「さぁね。そこまではあたしもわからないよ。まぁあの父親の事だから、下らない事かもね」

その言葉に、ありえるなとサイトは返すと

「じゃジョゼフに会いに行ってくるわ！」

そうイザベラに告げると、【グラン・トロワ】に向けて歩き出したのだった。

第8話

地上三千メイルの高さに位置する浮遊大陸。
アルビオン浮遊大陸と呼ばれる広大な大陸には、浮遊大陸と同じ名を冠した王国、アルビオン王国が存在する。
その王国の王都――ロンディニウムにある王城ハヴィランド宮殿。
そこのとある一室にて、国王ジェームズ一世は

「して・・・人払いをさせてまで、一仕官に過ぎんお前が朕に何を言いたいのだ？」

かなりの高齢により、昨今は政務が辛くなりつつある彼は、しかし王としての威厳を損なうことなく、鋭いまなざしでこの無礼者を見る。
その視線には一人の若い男。
特に特徴がなく、気を抜くとそこにいるのかどうかもわからなくなりそうなその男は、話によると最近下界の小国からアルビオンに渡ってきたらしい。
現在、弟であるモード大公に仕える下っ端衛士に過ぎない彼。
しかし、国を揺るがしかねない重大な話があると言われれば、粗末に扱うことも出来ない。
先日、彼から先立って渡されていた、《モード大公謀叛の疑い有り》と書かれた密書を思い出すジェームズ一世。
その彼にただ一言。

「エルフ」

と告げる。軽々しく出すことを許されないその名を、ジェームズ一世は驚愕を表に出さぬように

「先の謀叛話とエルフがどう関係がある？」
そう訪ねると、対面の男は初めて印象に残る笑みを浮かべると語り出した。

◆

「イザベラと婚約「却下っ！！」無礼だな貴様」
顔を合わせた途端、婚約と言い放つジョゼフに被せるように拒否するサイト。
「まだそう言うのは考えれねぇし、別に婚約なんて必要ねぇだろ？どおせ煩い奴らから逃げる口実なんだろ？まだお子ちゃまなんだからほっとこうぜ」
仕方がないな、とその言葉にジョゼフは頷く。
本当は口実ではないのだがなと思いながらも、サイトを呼び出した本当の理由を話す。
「最近、小国連中が騒がしいのは知ってるな？」
「ああ、何か色々争ってんだろ？」
「その争いの中心はマケドニア国と言うらしくてな」
マケドニア？なんか聞いたことあるような？前の世界で。

と思うサイトにジョゼフは続ける。

「なかなか実状が掴めなく苦労していたんだが、何やらアルビオンにて不穏な動きがあってな。それにその小国が絡んでいるらしい」

密偵から聞かされた話をサイトに言う。

「で、俺にどうしろと？」

「アルビオンに行け。ヒラガサイトとして内情を探ってこい。場合によってはイーヴァルディの名を使え。一応、余の親書と貴様に下賜している王家の証明物は持って行け」

そう告げると、ある一人の少女の名を告げる。

もしもの場合は保護しろと告げられた名前に、サイトは懐かしそうに少女の名を口にしたのだった。

「・・・テファ」

◆

あれから慌ただしく準備をし、いざ出発っ！と行こうとした所をシャルロットに捕まったサイト。

「一緒に行く」

簡潔に一言告げる彼女になんか昔のタバサを思い出すなぁなどと思いながら

「シャルロット「タバサ」・・・へ？」

「北花壇騎士団タバサとして行く」

どうやらサイトと共に行くよう指示を受けたらしい彼女が旅にアルビオンに同行する事になったのだ。
そして今はロサイスにいる。
港町――軍港としても栄えるそこは、なかなかに賑わいを見せていた。

（久し振りだな。本当なら、最初はルイズと共に来なきゃならないのに）

行き交う人々を見ながら、サイトは懐かしさと悲しさで複雑な胸中だ。
そんなサイトを不思議気に見つめるタバサ。
タバサの瞳に映るサイトは、黒髪黒目。
魔法薬にて蒼色を誤魔化し、幾分上等ながらも平民が着る服装をした彼のミョズニトニルンとしてのルーンもまた魔法薬にて隠されている。
右手の中指に、今まではつけていなかった竜を模した朱い指輪をはめ、背中にデルフリンガー、腰元には地下水を装備した（杖は魔法力の低さ故に置いてきた）彼を暫く眺めていたが口を開く。

「これから」

「へ？」

言葉少ないタバサに、首を傾げているサイト。

「行動指針」

「あぁなる程。どうしようか？」

付け加えられた言葉に、サイトは悩む。
元よりあまり考えずに行動するのが、彼の生き方だ。妙案など浮かぶ筈もない。だがしかし、これは恐らく依然あったモード大公の粛清だろうと踏んでいるサイトは、なんとかテファの両親を助けてやりたいと頭を悩ませながら歩くのだった。

◆

同じ頃、一人の小柄な少女が街を歩いていた。
ピンクブロンドの緩やかにウェーブがかかった長い髪。
貴族を表すマントと杖を持ち、気の強そうな瞳が幾分残念だが、誰もが美少女と頷くだろう少女。
そんな彼女は今は、上機嫌でロサイスを歩く。

「ふふ、これがあれば今度こそはちぃ姉様の病が治るはず」

肩に背負われた鞄の中に、彼女がある医者から譲り受けたポーションが入っている。
不治の病と言われた姉。その病を直す可能性がある薬を手に入れたのが、上機嫌な理由だった。

初めての他国への一人旅。
まだ年若い彼女に家族は猛反対したのだが、彼女はガンとして聞き入れなかった。

愛する姉の為――だけではなく自分自身の為でもあったのだ。
彼女は魔法が使えなかった。
ある高名な大機族の一員である少女にとって、周囲の失望や偉大すぎる両親達からの期待に応えられない事に、枕を濡らす毎日。
そんな時に、常に自分に優しくしてくれる姉の病を癒やす可能性がある薬がアルビオンにあると聞き、せめて役に立とうと志願したのだ。
勿論、彼女の両親に命じられたら護衛が離れて着いてきていたのだが、そんなことなど知る由もなく

「これくらい、あたしだって出来るんだから。お父様達、少しは見直してくれるかな？」

そう一人呟き、喜ぶ家族の顔を妄想していた彼女は――――。
前方から、同じく考え事をし歩く少年がいて――。
互いに前方不注意の為に衝突したのだった。

◆

「危ない」

と言うタバサの言葉に気付くのが遅れたサイトは、正面からの衝撃に対処出来なかった。

「いってぇっ！」

恐らく誰かとぶつかったのだろう。
その誰かともつれ合うように道端に倒れ込んでしまう。

「いたたっ・・・。ちちちちょっと、あんたっ！！いつまで人の上に乗っているのよっ！早く退きなさいっ！」

下から聞こえる声。

何故か聞き覚えのある声に、ビクッと体を痙攣させるサイト。

その際に、手が何かを掴んだのだが気付かない彼に、少女が叫ぶ。

「ひっ！？あああんたっ、へへへ平民の癖に白昼堂々と人のむむむ胸をっ！！」

「へっ？これが胸？」

どもりながら叫ぶ少女に、ポロッともらしサイトは押し倒している彼女を見る。

記憶より幾分幼く、更に小さい胸。

会いたくて逢いたくて、しかし叶うことがなかった少女。

薄れそうな記憶を必死に留めていたサイトの目の前には愛するその少女の姿があった。

感激して泣きそうになるサイトだったが、しかし気付いていなかった。

先程の胸発言に少女がキレている事を。

真横で見ていた、もう一人の胸の可哀想な少女もキレている事を。

ワナワナ震え、何やらブツブツと呟く少女。

なによなによ胸が小さくて悪かったわねあたしだって将来はちぃ姉様みたいになるんだがらと言うかなんでこんなあったばかりの平民に言われなきゃならないのよっ！！

と一息に文句を言うと、ギラリと凶悪な眼差しでサイトを睨みつけ

「だだ誰が貧乳よっ！！こここの犬ぅーーっ！！」

叫びと共に、股関を蹴り上げられる。

「お、お前は俺の切ない所ばっかり」

ぐぇぇっとの懐かしい痛みに、のたうち回る彼を押しのけ立ち上がると、トドメを刺そうと準備運動をする少女をタバサが遮る。

勿論助ける訳ではない。

「た、タバサさん？」

苦痛に脂汗を流して悶えるサイトは、冷ややかに見つめてくるタバサに命の危険を感じた。

「お仕置きは必要」

ただ一言。

そう言ったタバサは、桃髪の少女の代わりにトドメを差したのだった。

もう一度、サイトの股関を打ち抜いて。

気絶したサイトの足を引きずり立ち去るタバサ。

そんな彼女を見送りながら、桃髪の少女――ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、ケチが付いたと憤然とするも気を取り直し歩き出す。

ちなみに衝突し転んだ衝撃のせいで薬は破壊されており、怒り心頭になるのだがすでに船の上での事であり。

サイト――平民の顔など覚えている筈もなく地団駄を踏むのだった。

サイトにしては奇跡に等しい、この束の間の会合にこの時はまだ想

うこともなく。

第9話

サウスゴーダ地方。
王都ロンディニウムと港町ロサイスを繋ぐ、交通の要として栄えている場所だ。
その中心都市の名は、シティーオブサウスゴーダ。
人口が約四万人ほどの都市で、円形状の城壁とその内面――城下に造られた五芒星の大通りが特徴である。
一説には、六千年前に始祖ブリミルが降り立った場所とされている。
その都市を現在任されている太守――サウスゴーダ伯の屋敷にて、緑色の髪を撫でつけながら

「あの坊や達は帰ったの、お父様？」

妙齢の女性が話す。
女性の名はマチルダ・オブ・サウスゴーダ。
太守の娘である彼女に

「うむ。また来ると言っていたがな」

そう返すと、どうしたものかと悩み出す。

ガリアからの使者。
彼らが訪ねてきた理由は、現在この屋敷で秘密裏に保護している少女とその母親が目的であったのだ。
自身が仕えるモード大公の愛妾と、その間にもうけられた娘。
ある理由からモード大公により預けられている母娘。
エルフ――。
始祖ブリミルの敵として、いや今やハルケギニアに住まう人々の怨

敵として存在する彼ら。
そのエルフがモード大公の愛妾であり、当然娘もエルフ、正式にはハーフエルフとなる。
始祖の血を引く王家がエルフを愛妾になどと知られるわけにはいかず今までひた隠しにしてきたのだが、ここに来てガリアの使者が現れた。
理由が理由なだけに、簡単に手の内を見せることは出来ない彼は、知らぬ存ぜぬで追い返したのだが

「ガリアが知ったと言うことは、他に洩れている可能性が高い」

それを証明するかのように、あの黒髪の少年はアルビオン王家から引き渡しの使者が此方に向かってくるだろうと告げていた。
だが何故ガリアがそれを気にして、保護を申し出る？
しかもエルフをだ。
悩み答えが出ない彼に

「あたしはあの娘が、テファさえ幸せならどうでも良いんだけどね」

マチルダはそう言い、ティファニア達にあてがわれている部屋に歩いていった。

◆

「まったく時間がねぇってのに、分からず屋がっ！」

屋敷を出て、拠点としている宿に戻ってきたサイト。
同じくモード大公の屋敷から戻ってきたタバサに成果を問う。

「こっちもダメ」

簡潔に答えたタバサに、事の難しさを改めて思い知らされた。

「まぁ普通は警戒するよな。俺たちは他国の人間だし、理由が秘密にしていたエルフを保護しますだもんな」

「それが普通」

だよねぇと頷くと、天井を仰ぎ見る。

ジョゼフがエルフの保護の許可を出したのは、もしもの為の政治的な保険に過ぎないのだがサイトは違う。

サイト以外知る由もないのだが、彼女――ティファニアは虚無の担い手だ。

それを除いても彼女はサイトにとって大切な存在でもある。

例え彼女がそれを知らなくとも。

内情調査が一番の任務なのだが、難しく考えるのが苦手なサイトはいきなり彼女達の保護を申し出たのだ。

ジョゼフ自身争いになると踏みサイトを指名している為、別に良いだろうと考えたのだが・・・。

「うーん。どうしたものかね」

うんうん唸る彼に、タバサは名案とばかりに答える。

「拉致する」

「おぉいっ！？」

当然却下だった。

◆

――その日の夜。
モード大公はサウスゴーダ伯に会いに来ていた。
「そちらにもガリアの使者が参られましたか」
「それだけではない。王都からも使者が来てな」
まさかっ！？と返すサウスゴーダ伯に苦々しく頷く。
「エルフの母娘の力を使っての謀叛の疑い有り。容疑を晴らしたくば彼女達を差し出せだそうだ」
「何という・・・」
額に手を当て嘆く彼は、モード大公に
「最早猶予はないと思われます。何とか手を打たねばなりますまい」
もしもの時は、それこそガリアにと続けて言う。
「かの国の思惑は分かりかねますが、早急に打てる手はそれしかないかと」
「・・・それしかないか」

モード大公が力無く呟くと

「お父さん」

そう聞こえる声に振り返る。

「おぉっティファニアっ！相変わらず美しいな。母に良く似ておる」

金に輝く長い髪から覗かせるエルフ特有の尖った耳。

全ての女性が羨むような透き通ったキメ細やかな白い肌を持ち、全体的に細身な彼女。

ある一点だけは異様に目立つモノを持ってはいたが・・・。

兎に角、究極とも言える美しい少女は父との抱擁を交わすと

「ごめんなさい」

瞳に涙を浮かべながら父に謝った。

「何を謝る必要がある？」

「そうですぞ！ティファニア様！」

モード大公やサウスゴーダ伯が落ち込む彼女を慰めていると、ティファニアの母やマチルダも現れこれからのことについて話し合いを開始した。

「あたしはガリアに行くべきだと思うよ。このままじゃ殺されちまう」

父や大公の前だと言うのに焦りからか、地が出てしまっているマチルダの言葉に、しかし気にした様子も無くサウスゴーダ伯が頷き、ティファニア達に言う。

「時間が勝負の鍵です。王都より謀叛の嫌疑をかけられたということは、直ぐにでも軍が派遣される可能性があります」

「私はあなたに従います」

ティファニアの頭を撫でながら、その母親はモード大公に告げる。

「仕方あるまい。明日にでも行動に移すとしよう」

腹を決めたのか、モード大公はそう結論付けると良いなとティファニアに言い、彼女は頷いた。

それからも暫く話し合いが続いたのだが、細かな所は両親達に任せるしかないテファニアはマチルダと共に少し離れて会話していた。

「ガリアってどんな所かな？お友達出来るかな？」

両親達を眺めながら、不安気にマチルダに問う。

生まれてからずっと、屋敷に閉じこもった生活をしていた彼女。

彼女の世界は、両親とサウスゴーダ伯親子や屋敷の人達だけだ。

とても良くしてくれているのだが、それでもやはり外の世界に憧れてしまう。

彼女の望みは、お友達が欲しい――。

ただそれだけなのだ。

そんなティファニアを優しく見つめながらマチルダは答えた。

「ガリアってのはハルケギニア最大の国家さ。最近では、《イーヴァルディの再来》と呼ばれる奴が現れたらしいね」

イーヴァルディの勇者はティファニアも知っている。
わぁっと歓声を上げる彼女に

「それに、使者として来たあの黒髪の坊や。年もあんたに近いだろうし、なかなか良い目をしていた。友達になれるんじゃないかい？」

続けて言われたマチルダの言葉に、頬を赤らめ嬉しそうに頷く。
ハルケギニアには珍しい黒髪黒眼の少年。
あの時、実は隠れてこっそりと見ていたティファニアは強く印象に残っていたのだ。

「お友達になってくれると良いな」

そう呟くと、マチルダに木漏れ日のような笑顔を見せたのだった。

だが、しかし――。
彼女の想い虚しく、深夜に屋敷を襲撃される事となる。
まさかこんな時間に、しかもこんな早急にとは思わず油断していた
彼らは手も足も出ず――。
ティファニア達母娘が、争乱罪として王都に出向くからどうにかと
頭を下げたことにより、彼らは命を救われることになったのだった。

◆

翌日、朝日が昇るより早く―――。
争いがあったと思われる後を見つめながら、通された屋敷でサイトは怒りで奥歯をかみしめていた。

「くそっ！どうして気が付かなかったんだっ！」

如何に深夜とは言えども、襲撃されれば街の空気などでわかるくらいには、経験を積んでいた彼は出遅れた事が許せなかった。

「今は悔やむときではない」

フォローをしたいが、しかし今はそれよりもと思い、タバサは現実を直視させるように言うと
今ならまだ間に合うと続ける。
死者こそ出なかったものの誰もが傷を負っていた。
サウスゴーダ伯は意識不明の重体であり、モード大公はティファニア達とともに連行されている。
サイト達にことの真相を話したマチルダ自身、治癒魔法で癒してはいたが、あちこちに包帯が見えていた。

「お願いだっ！何でもするっ！あたしの人生をくれてやっても良いっ！だからっ・・・！！」

お願いっ！お願いしますと、俯いて涙ながらにサイトに訴えるマチルダ。
一度目のサイトがいた世界で、ロングビルと名乗りまた怪盗【土塊】のフーケとして有名だった彼女にサイトは

「あぁ分かった。まかせろっ！」

力強く頷き、言葉を返すと
絶対にあの悲劇は繰り返させねぇっ！！
シャルルが襲われた時と同じように、胸の内で再度誓うのだった。

第１０話

――早朝。
謀叛人と、それに加担するエルフの母娘を捕らえたと言う報を受け
一人の青年が面会に赴いた。
年の頃は二十歳に届くか届かないか。
金髪碧眼の美青年の彼は、すれ違う衛士や召使い達の会釈を律儀に
返しながら、目的の場所にたどり着く。
とても大罪人が収容されているとは思えない扉の前。
その扉の左右には、衛士達が直立不動で構えている。

「ウェールズ殿下。どうなされましたか？」

敬礼し問う衛士に彼――アルビオン王国王子ウェールズ・テューダーは

「御苦労。ここに叔父上達がいるんだね？」

にこやかに笑みを浮かべながら問う。
まさかと互いに衛士達は顔を見合わせると、恐る恐る訪ねる。

「まさかとは思われますが・・・」

「そのまさかだよ」

サラッと返す彼に、とんでもないっ！とばかりに拒否する衛士達。
だがしかし、柔和な表情を浮かべながらも頑として聞き入れない彼
に諦めたのか、扉を開き

「あまり長くは・・・」

「わかっているよ」

そう言い部屋へ足を踏み入れるウェールズは、すぐに3つの人影を見つけ

「お久しぶりです。叔父上」

叔父と呼ぶ壮年の男性に深く頭を下げると、続けざまに

「そして・・・初めまして叔母上、従姉妹殿」

緊張した表情で、ティファニア達母娘に視線を向けたのだった。

◆

王都に向かい疾走する一匹の風竜。

サウスゴーダ伯が所持していたそれを借り受け、サイト達はマチルダと共に目的地を目指していた。

初め怪我をしているマチルダに、待っているようにと言ったのだが

「自分には責任があるし、家族を守るために他人に任せっきりじゃ性にあわないんだよ」

と口にし、今は共にいる。

彼女が言った言葉には嘘はない。

しかし、もう一つ理由もあった。

（この黒髪の坊やはともかく、ちっこい嬢ちゃんは間違いなくガリア王家の人間のはず）

隠すことなく晒されているタバサの蒼い髪を見ながら

（王家の人間をワザワザ交渉人に選んだんだ・・・上手く使えば助けられる）

例えそれで彼等が内政干渉だと言われても、知ったことではない。

そう考えながら、さてどうするかと思いサイト達に声をかけた。

「巻き込んどいて何だけど、何か良い手はあるのかい？」

とても貴族のご令嬢とは思えない口調に、イザベラを思い出しながらサイトは答える。

「まぁ一応は。あまり使いたくなかった手何だけど」

そう言い、タバサにジョゼフから渡されていた親書の確認をさせる。

「ガリア国王からの？」

「ああ。権力には権力だ」

後のゴタゴタはジョゼフが何とかしてくれるだろう。

そう思っているサイトを見て

（期待通りに行きそうね）

とマチルダは内心で小躍りしていた。
暫くして、王城が見えてくると

「髪と目」

「うん？」

タバサがサイトに指摘しながら、魔法薬が入った瓶を渡す。

「今回は王家として動くから」

「タバサだけじゃダメか？」

「ダメ」

あっさりと切り捨てられた言葉に、ガックリと肩を落とすサイトはあまり目立ちたくないんだけどなぁとぼやきながら、薬を飲み干した。
その様子をいぶかしげに見ていたマチルダであったが、やがて驚愕の表情でサイトを見る。

「あ、あんた・・・」

見つめる先には、ガリア王家特有の髪と瞳に変化し、タバサに羽織らされた背中に二本の杖が交差された王家の紋章と、その紋章に良く似た噂の勇者を示す長剣（デルフリンガー）と短剣（地下水）の二本の剣が交差された紋章が左右の肩口に描かれたマントを身にまとうサイトの姿があった。

◆

マチルダがサイトの正体に驚き、また歓喜している頃。
父、ジェームズ一世が座する玉座の横でウェールズは頭を悩ませていた。
彼の悩みの原因は、先ほど挨拶を交わしたエルフの母娘だった。
当初、エルフとはどのようなものかと興味本位で会いに行っただけだったのだが

（あのような純朴な娘を、エルフと言うだけで処刑しても良いのだろうか？）

彼女だけではない。その母親もとても理知的で、優しくもてなしてくれた。
彼女達を見るだけで、エルフと言う種族全てがわかるわけではない。
だがしかし――。

（ティファニアは私を、兄と呼んでくれた）

恨み言一つ漏らさず、両親以外の初めての血縁者に会えたことが嬉しかったのか、笑顔で話しかけてくれた彼女。
ウェールズは謀叛などとはもはや信用してはいなかった。
ただ純粋にエルフの血が王家にあるのが許されないための処置だと理解している。

（だが・・・）

彼女達の気持ちに触れ、深く苦悩する若き王子。
しかし、時間は待ってはくれない。
最期の慈悲にと、周囲に反対される中ジェームズ一世に目通りを許

されたモード大公とティファニア達が謁見の間に通されて来たのだ。

「エルフ」

「あれが悪魔の一族」

ティファニア達を見て周囲がざわめく。
自分達を見て戦慄く彼らに、ティファニアの顔が悲しみで歪む。
それを見て、ウェールズの胸が締め付けられそうになる中、ジェームズ一世とモード大公達の謁見が開始されたのだった。

険しい顔つきで幾つか罪に対する問い掛けするをジェームズ一世に、モード大公は全て否と答えていく。
彼はただ、愛する家族と残り少ない余生を過ごしたいだけで、何ら罪に問われること覚えなどない。
そう毅然と言い放つ。
だが、世間はそれを許さない。
エルフの愛妾とその娘。
たったそれだけで、王家が潰れかねないのだ。
自らの罪を拒否しつつも、ティファニア達の命を嘆願するモード大公。
愛する家族を守ろうとする父親の姿を見たウェールズは、遂に覚悟を決めたのかジェームズ一世に向けて口を開こうとした時――――。

「も、申し上げますっ！！」

謁見の間に駆け込んできた衛士が告げたエルフ襲撃の内容に、場が戦慄し騒然となる。

「なんだとっ！！」

「エルフの襲撃じゃとっ！？」

驚くべき報告に、場にいた重鎮たちは次々にティファニア達を非難し始める中。

「違いますっ！私たちはなにも知りませんっ！」

彼女達の悲痛な叫びが響き渡るのだった。

◆

ようやく王城に辿り着いた、サイト達の目に飛び込んできたのは件のエルフの姿だっだ。

「おいっ何だよあれっ！！」

城門前で、数人の衛士達相手に暴れている人物は長めの銀髪から覗く尖った耳。

エルフ特有の端正な顔立ちに何の感情を浮かべずに立ち回るその姿に、理解が追いつかないサイト達。

「ど、どうしてエルフが？」

激しく同様するマチルダの横でタバサが呟く。

「助けに来た？」

ティファニアを助けに来たと言いたいのだろうタバサに

「違うぞ娘っ子っ！あのエルフの目を見なっ！」

いつの間に抜かれたのか、サイトの左手に握られたデルフリンガーに即座に反論されタバサはエルフを観察し、あることに気づく。

「目の焦点があっていない」

濁りきり虚ろな瞳を確認すると、思い出すはあの古代竜。

サイトも同時にそれに思い至る。

「まさかアイツが絡んでるのかっ！？」

何のことだかわからないマチルダ。

その彼女をよそに、タバサが言う。

「その可能性が高い」

そもそも、昨今騒がしくなった小国同士の争い。

それと合わせるかのように、ガリアやアルビオンと言った力のある国に暗躍し始めた影の調査の為にここにいるのだ。

確実な証拠はなくとも、その争いの中心国である《マケドニア》が怪しいと判断できる。

サイトの脳裏によぎるロープ姿の人物の言葉。

『茶番劇だよ。本来の歴史に近付けるためのな』

タバサの母を救えなかった事を思い出す。

以前のエルフの薬より強力なせいで、未だに回復薬が見付からない。
苦い思いを胸に、ギリッと奥歯をかみしめる。
何が歴史の修正だっ。人の命を、想いを弄びやがってっ！！
（ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな）
怒りに、景色が朱く染まり
「ふざけんじゃねぇぇぇっ！！」
叫びを上げて、エルフに突っ込んでいく。
「簡単に突っ込むんじゃねぇ相棒っ！」
デルフリンガーの言葉虚しく、頭に血が上ったサイトはエルフに素早く駆け寄ると、上段から力一杯デルフリンガーを振り下ろす。
ガキィィィンッ！
「なぁっ！？」
強度なガラスにぶつけたかのような感触で弾き返されたサイトは、驚愕しつつも反動を使い体を回転させ水平に切りつけるも――――。
ガキィィィンッ！！
またも弾かれて多々良を踏む。
「旦那冷静になれよっ！」

「相棒っエルフに生半可な攻撃は効かねぇのは覚えてるだろっ！？」
地下水とデルフリンガーの叫びにようやくサイトは、返事を返す。
「じゃあどうしろってんだよっ！」
「やれやれ相棒。頼むぜホントに」
エルフを睨み付けるサイトに、デルフリンガーは疲れたような声を出す。
操りの秘薬のせいか、先の火竜のように単純な動きしかしないのだが救いだ。
現に今、ただ立ち尽くすだけで何もしてこない。エルフと戦っていた衛士達も、今は遠巻きに撤退している。
「良いか相棒？先の古代竜よりアイツは遙かに弱えよ。だがな・・・」
「あの時は《ヴィンダールヴ偽》のおかけだっただろ旦那？今は偽ルーンなんかないし、あいつは幻獣じゃないから、かなりきついぜ？」
デルフリンガーの言葉を引き継ぐ地下水に、ぐっと苦味を噛み締めるサイト。
「まぁ救いはあまり高位の《行使手》じゃないことかね？ビターシャルより遥かにマシさね」
「わかるのか？」

「まぁね。こっちに来てからパワーアップしたせいか、その気になりゃあ魔力が見えちゃうんだよね」

「俺もだぜ旦那。あいつが契約してる空間は精々十メイルくらいだ」

「城塞丸ごと使うビターシャルより、遥かにマシさね」

まっそれでも厳しいがねと言うデルフリンガー。その言葉を聞き

「ルーンはねぇけど、奥の手はある。だけど、どう使えば良いかわかんねぇ」

サイトは右手の中指にはめている指輪を見て答えた。

あの時、気絶する前に指示を出し竜から取り出した心臓で加工した指輪。古代竜の心臓には莫大な魔力が籠められている。それを使い古代様々な実験を行っていたらしい。

その魔力の塊の指輪の力は1日一回しか使えない。

強すぎる力にサイトの体がついて行かないのだ。その代わり、一回だけならあの竜の力が、技が使える。勿論、ここで使うには被害が出過ぎる物が多く限定されるのだが・・・。

「とりあえず・・・マチルダさんっ！」

不意に呼ばれたマチルダは、体をビクリと震わせ

「あ、あたしに何かさせるつもり？」

流石にエルフ相手には辛いのか、顔色を青くするが

「いや、これを・・・地下水を預かっていて下さい」
エルフ相手に魔法は無意味っすからと、地下水を手渡し再度エルフに向かう。
その横にタバサが付き従う。
「援護する」
そう言うと歌い上げるは《ウィンディー・アイシクル》
風と水のトライアングルスペルを唱えると、身長より長い節くれだった杖をエルフに向ける。
ゴヒョァァオォォッ！！
幾つもの鋭く尖った、氷の短槍が風に乗り襲いかかり、ガキィィィンッ！と当然のごとく弾かれる。
それと合わせるかのように、いつの間にか背後に回り込んだサイトはエルフの背中を切りつけるも
「なんだよっ後ろにもカウンターが発動するのか！」
これもまた届かず、顔をしかめる。
「我、契約せし精霊よ。古の契約に基づきその姿を現せ」
防ぐだけだったエルフが動く。
城門横に携えられていた松明の篝火。
それが一瞬力強く燃えさかると、火柱をあげ炎が巨大な人の姿を形どる。

「おいおい。何だあれ？どこが弱いエルフなんだよ！」
現れいでた炎の魔神に口元を痙攣させるサイトに
「弱いっつっても、相棒よりかは強いね」
当然だろ？と簡単に言うデルフリンガー。
「んな事わかってうわぁぁぁ！」
ドゴォォォォンっ！！
呑気に話など許してくれないらしい魔神。
頭上から振り下ろされた炎の拳を間一髪避けると、地面が爆発したかのように抉れる跡を見て青ざめる。
「冗談じゃねぇ」
とりあえず更に離れてと足を後ろに運ぼうとするサイト。
すると、魔神がにゅっと両腕を突き出しズババババっと幾十もの火の弾丸を打ち出した。
「ぬおおっ！」
まさかアウトレンジからと焦りながら、幾つか打ち払うも
「ちょっ無理無理無理！」
ガンダールヴならいざ知らず、鍛えているとはいえ只の人なサイトは悲鳴を上げる。

「エア・ハンマー」

ぶおおぉぉぉ！

トライアングルスペルで唱えたエア・ハンマー。見かねたタバサが、弾丸に向けて横殴りの強風を叩きつける。

間一髪サイトからそれたそれは左斜め後方に飛んでいく。

ドゴォォォンドゴォォォンドゴォォォン！！

「のわぁぁ！！」

「きゃああっ！！」

着弾音と共に聞こえる幾つかの悲鳴。

「・・・・・・・」

なに今の？ははは、まさかねと半笑いで敢えて振り返らないでいると

「尊い犠牲だった」

ポツリとタバサ。

「んなわけあるかぁ！」

ガバッと後ろを振り向くと、土煙の中に何人もの人影が見えた。

「死んでないよな？」

洩らす声に答えるかのように、土煙が晴れていく。
姿を見せたのは、ジェームズ一世やウェールズ。そしてモード大公達家族だった。
驚きからか体勢を崩し、座り込んだり隣の人物にしがみついたりしてはいるが無事のようだ。

「カウンター？」

その集団の先頭に立つ女性を見て、サイトは言う。

ティファニアを大人にすればこうなるだろうと思われる女性を見て、ティファニアの母と悟る。疑いを晴らそうとウェールズ達に頼み込みついてきたのだ。

「・・・テファ」

懐かしい顔を見て、思わず呟く。
デルフリンガー以外聞き取れない程の小声で、また会えてうれしいと続ける。

（テファがいるんだ。これ以上みっともねぇ戦いは出来ねぇよな）

律儀に待ってくれているエルフに向き直し、キッ睨みつけるサイト。

「テファ！」

「マチルダ姉さん！」

ティファニアの姿を見て、そばに駆け寄るマチルダは心配げに大切

な妹の姿を見る。

「大丈夫？怪我は？」

「何ともないよ姉さん。それよりあの人」

「あんたを助けに来てくれたんだよ。髪と目の色が変わってるけど家に来たあの坊やだよ」

重なる面影に、頷くティファニア。

「それに・・・あのガリアのイーヴァルディみたいだよ」

続けざまに言われた名前。
お友達にと願っていた人物が、まさかの大物と驚くも。
まだなにも知らない自分の為に来てくれたと、期待を込めて熱い眼差しでサイトの姿を見つめるのだった。

第１１話

「ガリアのイーヴァルディ殿？何故、そんな人物が？それにあの娘。あの子も王族だろう？」

マチルダの言葉が聞こえたのか、ウェールズは睨み合うエルフとその少年と少女に視線を送りながら問う。

「ある事情があって家に訪ねてきたのさ」

先の恨みか、ぞんざいな口調のままでウェールズにマチルダは答える。

まさか、亡命を勧められたとは言えるわけもなく、短く答えた言葉にそうかとだけ頷く。

（まさかあの坊やがガリアの王族とは思わなかったけどね）

噂に名高い、【ガリアの剣】――――何故エルフが襲撃して来たのかは謎だが、何とかしてくれるだろうとマチルダは考えていた。

（あの最悪最強な魔竜を倒したんだからね）

そう思う彼女だったが、あれは様々な幸運と裏技があってなされた奇跡的な勝利であり、当然それを知る由もなかった。

◆

敵はエルフと使役される炎の魔神。

どちらも人の手には余りすぎる存在だが怯むわけには行かない。

「ちゃっちゃとケリつけて、ティファニア達の事を話し合わなきゃならねぇ」

この敵を何とかすれば、恩も売れる筈。
そう考え気合いを入れ直す。

「良いか相棒。何も倒す必要はないんだ。何とかして戦闘を終わらせりゃ良い」

「何とかって、何だよ」

「それは知らね。俺ぁ剣だからよ。考えるのは相棒の仕事だ」

何だよ仕えねぇと呟くも

「だけどそうだよな。この場から引かせりゃ良いって考えたらまだマシか」

そう言い、炎の魔神に向けて走り出す。

（交渉を巧く纏めるには力も必要だ。この戦い無傷で乗り切るっ！！）

「とりあえずてめぇからだぁっ！」

サイト目掛けて再度撃ち出される炎の散弾。
それをタバサがまたエア・ハンマーで防ぐ。

「うらぁぁぁっ！」

ザンっ！と右足を凪払う。

「げっ！？」

斬りつけた場所が、すぐさま再生する姿に声を漏らす。

「よく考えりゃ、ありゃ火の塊だから切るなんて無理かもね」

「おいおい。剣士にそりゃあないよ」

せめてガンダールヴなら、素早く再生する間もなく炎をかき消せたかもしれない。

「そもそも相棒のルーンはなんだ？」

「ミョズニトニルン」

「そうそれ。なのに竜の指輪以外何のマジックアイテムも用意してねー。シェフィールドのやっかいさを覚えてるだろ？剣士で生きてきた相棒の気持ちはわかるんだけどね。今はミョズニトニルンなんだから使える力は使わないと」

うっ、とデルフリンガーの指摘に呻くとばつが悪そうなサイト。

「今度からそうするよ・・・多分」

そう言い、思い付いたかのようにデルフリンガーを頭上高く構える。

「ならミョズニトニルンらしくしてやらぁ！」

一瞬額が輝き、そして更にデルフリンガーが光る。
炎の魔神から幾らか得た魔力とサイトの魔力。
少し心許ないけどと思いながら、上から下へとデルフリンガーを振り下ろした。放たれるは、極大の光刃。
シュバババァンっと放たれたそれは、古代の魔竜を倒した時ほどの威力はない。
しかし思ったよりも力強いそれは魔神を容易く2等分にし、共に消滅した。

「何だこれ。あっけねぇ」

「そりゃまあ、所詮火の塊だかんね。竜と一緒にするのが間違いってもんだ」

自身の力ともたらした結果に呆然とするサイトに、デルフリンガーが分かり切っていたとばかりに軽く言う。

「・・・あれが、イーヴァルディの勇者の力」

サイトが解き放った光刃の威力に目を見開くウェールズ達。並みのスクエアクラスにも出来ないだろう、光の攻撃に生唾を飲み込む。
目の前の戦いに、他の者達もティファニア達を忘れてしまう。

「アルビオン国王陛下ジェームズ一世とお見受けする」

スッと近寄るタバサ。
早い内に親書を手渡した方が良いと判断し、魔神が倒れた隙に行動を起こしたのだ。

「そなたは？」

「ガリア国のシャルロット・エレーヌ・オルレアン。今はこのような時の為幾ばくかの失礼のご容赦を」

「オルレアン？おお！シャルル殿の御息女か。構わぬ。して要件は？」

「ガリア国王ジョゼフから、親書を預かっております。此度の騒動の一件について参考になるかと」

初めて長い事話すタバサを見て、なんだ話せるじゃないかとマチルダは思いながらもジェームズとタバサのやり取りを見ていた。
他国の者だけに戦いを任せるのは良くないと思いながらも、周りに止められヤキモキしているウェールズ、そして先程皆を庇ってくれたは言え未だ警戒されて動けないティファニア達もその様子を見る。

「なんと！・・・ふむ。しかし」

書かれている内容に目を見開きながら何かを思案するようにティファニア達を見つめる。
その姿を横目で確認したサイト。

「あっちはタバサに任せて、今はあいつだ」

デルフリンガーを肩に背負い、エルフに駆け出す。

「案は浮かんだのか相棒？」

「まぁな。あるゲームを思い出した！」

ゲーム？と聞き返すに、お前も知ってるゲームだよと共に日本にいた時にしたゲームの名前を口にする。

一閃二閃と剣を振るうが、当然のごとく届かない。

（だけどこれで良い！次の先住魔法を使う集中をさせなきゃ）

それに近寄るのが目的でもあったサイト。

「効かなかったらどうするんだよ相棒？確証なんてないだろ？」

「そんときゃそん時だよ！」

そう言うと、地下水！と叫び右手を挙げた。

「なんだ旦那。やっぱ俺が必要なんだな」

嬉しそうに声を上げながら、右手に現れる地下水。

いきなり手から消えた地下水にマチルダは驚いている。

「無傷で勝つんだ！今回も裏技使わせてもらう！」

そう言い地下水を握ったままの右手をエルフにかざす。

いや触れようとするサイト。

その一見無防備な姿に、タバサ以外の者達は目を見開いた。

他国の王族に何かあれば笑い事ですまない。どうする気だと見たその時、サイトの右手が、否右手中指にはめた指輪が光り輝いた。

「対魔法反射呪文(リフレクト)！！」

エルフとサイトの間で何かがぶつかり音を立てる。
押し合いでもしているのか、空間が軋みを挙げた後――――。バリィィィン！とガラスが砕けたかのような音が鳴り響き、サイトの右手がそのままエルフの顔を殴りつけた。

「なぁっ！カウンターを殴り砕いた！？」

またも見せられたら非常識な光景に、開いた口が塞がらないウェールズ達。
それを後目に、サイトは追随をかける。

「思った通りだ！互いに干渉しあった！」

思い出すは、某最終と名の付いたファンタジーゲーム。
リフレクトからの反射はリフレクトでは返せなかった。一か八かのバカみたいな賭けではあったが、今ここでは、結果が全てである。

「うるぁぁぁ！！」

先住魔法を使う隙など与えない！
素早くデルフリンガーの柄で殴り飛ばし、更にとばかりに回転して顎を打ち上げる。

「デル・ウインデ」

地下水通して唱えられた、風の刃のスペルがエルフを弾き飛ばし上空に巻き上げる。

その時地下水が、あれ？などと言っていたが気付かない彼は、今度は地下水に自身が使える最強のルーンを唱えるように言う。

サイトの言葉に、先の違和感に何か思い当たる所があったのか

「どうなっても知らないぜ？」

そう地下水は言うと、まぁマスターの言葉には従うけどねと呟き唱えられたルーン。

ぶるるるあおおおおぁぁぁぉぉぉっっ！！！

顕現するは巨大な竜巻。突如現れたそれに、サイトは目を見開いて棒立ちになった。

「・・・へ？」

「おー！あのエルフ死んだな！」

「カッタートルネードだぜ旦那！」

巨大な竜巻に更に舞い上げられ飲み込まれるエルフ。

竜巻の衝撃は堪えれても、幾重にも織り成す真空の断裂は防ぎようがない。

「ま、運が良けりゃ何とかなるさね」

デルフリンガーの言葉に何とか再起動したサイトは慌てて地下水に言い寄った。

「なな何だよあれ！ラインレベルしか無理なんじゃなかったのかよ！」

「いやぁ、途中違和感はあったんだけど今のでハッキリしたぜ旦那」

「だから何がだよ！」

「旦那は杖じゃ、魔法の能力はドットの下の下の下だったただろ？力はあるのに杖じゃ鍵が巧く開かないって話したのは覚えてるよな？」

サイトが放ったカッタートルネード。さすがのタバサも驚いたのか固まってしまっている。

「ああ・・・それで？」

「既存の杖じゃ旦那の力は引き出せない。だけど俺みたいなインテリジェンスウェポンなら大丈夫みたいなんだよな。先住魔法のせいか、相性のせいか、はたまたパワーアップしたせいかは解らないけどな」

「はぁ？何だよそれ！」

サイトのボヤキと共に、魔法の効果が消失。

「・・・・！？」

だがしかし、エルフの姿も消えていた。

「消えるくらい切り刻んだ？」

「のおおおぉぉっ！」

タバサの言葉に絶叫するサイト。
華々しい勝利だと言うのに全く持って締まらない、彼の叫び声が城内に虚しく響き渡るのだった。

◆

エルフの襲撃から時間はたち、今は昼過ぎ。
戦いの後始末の為に、慌ただしい城内。
その一室にてサイトは安堵のため息をはいていた。

「はぁ良かった」

先程届けられたら報告で、あのエルフが郊外の街道で倒れていたのを保護したとあったのだ。
どのようにして逃れたのかは分からないが、とりあえず安心したサイト。腰掛ける椅子にだらしなくもたれようとしたが、彼の対面にいるジェームズ一世の前で、そんなことは出来ない。

「疲れている所悪いが、良いかなイーヴァルディ殿？」

疲れ気味のサイトに、少し遠慮気味なジェームズ一世に、構いませんと告げ中断していた話を再開する。

「ジョゼフ殿や貴殿達の言葉により、先の争いが何者かの陰謀なのはわかった」

ガリア自体も火竜の事件が、何者かの陰謀だと言う事は話てある。

「朕に今回の事を告げてきた衛士なんじゃが・・・不思議なことに誰も覚えておらん。いや、初めからその様な輩は存在していなかったらしくな」

どうやら躍らされたようだ、恥ずかしい限りと続ける。

「だが・・・それと我が王家にエルフの血が交わる事は別問題だ」

「なっ！？」

「落ち着く」

立ち上がるサイトに、彼の腕を掴みタバサはたしなめる。

「彼女達が誰かに何か迷惑かけたかよ！あんた達が勝手に騒いで罪を押し付けて・・・っ！！」

が、しかしサイトは止まらない。

一国の王に許される態度ではないが、ジェームズは別段気にした風もなくサイトを見る。

「貴殿がどう受け取ろうとも、これは我が国我が王家の問題であり・・・それにそれだけエルフの名前は鬼門なのだ」

「エルフと言うだけで、傷つけるのかよ！人間はそんなに偉いのかよ！」

「正しいことだけが全てではない。感情論だけでは国は成り立たん。もし彼女達を受け入れたとして、この国が滅びを迎えたらどうする

？」

「勝手に起きても無いことを決めつけんな！前に進もうとしない奴が国を巧くまとめれる訳ないだろ！大体・・・国が危険になるのなら俺が敵を倒してやる！！」

「兄さ・・・サイト」

次々と言葉を吐くサイトに、流石に危険を感じるタバサ。大体勝手に他国の危機を請け負うなどと言ってはならないのだ。

「ふふふ。いや流石はガリアのイーヴァルディ殿」

どうしようかと悩むタバサを救うかのように、扉が開くとウェールズが嬉しそうに笑いながら現れる。

「悪いけど、聞かせてもらっていたよ。陛下、私も彼ら達に賛成です」

突如現れた彼は、父にそう告げ擁護する。

「ウェールズ、しかしな」「先に進まない為政者に国を語る資格はない。まさにその通りではないですか。しかもエルフとは言え彼女達はこの国の民であり・・・何より家族です。家族を守れない者が国を守れましょうか？」

ウェールズの援護射撃に嬉しそうなサイト。

ああそうだ、こう言う人だったと懐かしむ。

「国を守るためには、あらゆる犠牲を覚悟しなければならない」

「だからエルフは必要ないと！それがそもそもおかしいのです。彼女達と接して陛下は、いや父上は何も感じなかったのですか？」

「・・・うむ」

黙り込むジェームズ一世。既に彼女達が良き存在などとは分かり切っている彼はしかし、今までの習慣や感情を無視できないでいた。

「イーヴァルディ殿がおられるガリアは今様々な改革をしておられると聞き及んでおります。医療・工業・農林水の各産業や教育など幅広く行い平民の登用もあるかと？」

チラッとサイトを見るウェールズに、その通りだと頷く。

「平民の登用などと世間から、いえ貴族から非難を浴びそうな事ですが、その結果優秀な人物達を発掘し今ガリアは好景気を迎えているのは御存知でしょう」

「・・・一部エルフもいる」

ウェールズの言葉に被せるかのようにタバサが言う。母を救うためにとジョゼフが招致したのだ。内々の秘密なのだが告げられたその言葉に、流石のウェールズも驚きを表すが

「かの大国は既にエルフを交えている。我らも時代に乗り遅れるわけには行きますまい！これから先の未来の子供達の為にも！」

それに、先の戦いで勇んだ私達を救ったのは彼女達エルフですと、カウンターで救った事を持ち出す。

暫くの間。沈黙が何拍か続いた後、その重い口をジェームズは開いた。

「そうだな。そうだったな」

あれだけ酷いことを、殺そうとした自分達を非難せずしかも救ってくれたのだ。
人間同士ではまずないだろう打算なき優しさを思い出す。

「新しい国造り。未来の子らの為か・・・。朕はどうやら古い人間のようだ。これから先はウェールズや貴殿らのような若き可能性に満ちる者達の出番だろう。新しい時代には新しい者達だ」

じゃあ！とその言葉にサイトとウェールズが声を上げる。

「うむ。朕が間違っていた。此度の事は正式に謝罪し彼女達を受け入れよう」

その言葉に、バァンと扉が開かれる。

「ほ、本当に？本当ですか陛下！」

彼女達も立ち聞きしていたのだろう。現れたマチルダは零れ落ちる涙を我慢することなく問う。
その横のティファニアもそうだ。
モード大公はティファニアの母の肩を抱いて、静かにジェームズの言葉を待ちわびる。

「朕に二言はない。済まなかったな。そちらには辛い思いをさせた・

・・今を持って正式にアルビオン王家にそなたらを迎え入れることを宣言しよう」
一国の王が深々と頭を下げ、そして宣言された言葉。
それに併せて室内に歓喜の争いが吹き荒れた。

「良かった・・・本当に良かった」

「マチルダ姉さん」

泣きながら互いに抱きしめあう姉妹。
どれだけ夢見ただろう。決して叶えられないと思っていた夢が叶い、
涙が止まらない。
サイトも感動したのか、目を潤ませタバサは横を向いている。
暫くして落ち着くのを見計らいこれからの問題を挙げるジェームズ。

「貴族や民は何とか出来るだろうが、問題はロマリアだ」

宗教国家ロマリア。
始祖ブリミルを仰ぎ見るその教団は強大で異端を決して許さない。
ハルケギニア全土に広まる彼らの教義はないがしろには出来なく、
形式上教皇は王より上となっている。
その教皇に破門などともしも言い渡されたのなら、その人物は破滅
を迎えてしまう。
特に今回は国家の存亡がかかっている。さてどうするべきかと悩む
彼らに、サイトはこの時の為にと用意されたジョゼフのもう一つの
親書を渡すと

「手ならあります。まぁお二人、国王陛下とウェールズ殿には死ぬ
ほど働いてもらいますが」

ニヤリと悪巧みをするかのように笑みを浮かべるのだった。

暫くして、二人は精力的に動き出す。
まずは、ガリアとの経済や技術の提供及び提携。軍事同盟は周囲の国々に要らぬ混乱をもたらすためにあくまで経済的な同盟である。
アルビオンに置ける各種制度の改革に動く一方で、ウェールズはロマリアへと飛ぶ。
今回の事に対する、理解を得るために教皇と話し合う必要があり、口下手なタバサやまだ顔を合わせるわけには行かないサイトの替わりに、急遽イザベラに白羽の矢が立ち当事国と支援国として二人はロマリア教皇と会談を行っていた。
ロマリアにつけいる隙――それは教皇交代によりその頂に付いたヴィットーリオ・セレヴァレは未だに完全に教団を掌握出来ていないと言うことだ。
彼の若すぎる年齢とその美貌、そして噂にある出自のせいで利権を争う物達には目障りなのだ。聖なる教団と唄っていても所詮は人の集団。欲に刈られた教団の司祭達の搾取や横暴により、今やハルケギニアでも指折りの貧困さであえぐ国となっている。

「ええ、そうですわ。我がガリアは向こう三年、各種支援をヴィットーリオ様にお約束します」

教団ではなく、ヴィットーリオへと言うイザベラ。
普段とは違う女性らしい話し方にサイトが見れば笑うかもしれない。

「アルビオンもです猊下。猊下の為ならば、あらゆる支援も辞せません」

秘密裏の会談の為に、小さな狭い室内での会話。

「有り難い御言葉です。あなた方の行いに始祖も喜ばれるでしょう」
何が始祖だと内心バカにするもおくびに出さないイザベラ。
イザベラやウェールズの感情などお見通しのヴィットーリオは、しかし笑顔を崩さない。
ヴィットーリオとて綺麗事だけでは生きてはいけないのだ。そのためにはガリアとアルビオンからの援護は有り難く、ヴィットーリオがこの教団を押さえるのには必要なのだ。
教団ではなく彼自身に扱える純粋な資金や物資は、喉から手がでるほど欲しいものであり、そのためならエルフの一匹や二匹など今は捨て置いてもかまわないかと考える。
しかし、流石にエルフの問題は大きくなかなか話がまとまらないで、数日が過ぎていた。
彼女達に対する免状を得たいウェールズだが、今日こそはと最大限に譲歩して三年と言う時間を提示したのだ。
そして、彼らを後押しするかのような情報がアルビオンから届けられるのだが、それは数刻後の話であった。

◆

親交を深めるべく、二週間ほどの間滞在していたサイト達であったが、流石にこれ以上はとなり帰国することとなっていた。
「サイト・・・ありがとう」
涙目で見送りに来たティファニア。
彼らのおかげで、これ以上ない結末を迎えられた彼女は初めてのお

友達が彼で良かったと喜んでいた。

「俺は何も・・・結局陛下を動かしたのはウェールズだし、今も頑張ってるのは俺じゃなくイザベラだからな」

「そんな事はない。貴方が来てくれたから・・・私達の為に陛下にあんなに怒ってくれたから」

そう言いながらサイトにギュッと抱きつくティファニア。
ピクンと無表情を揺らし、それを見るタバサだがまぁ別れの挨拶のためと我慢する。

「ありがとう。私の大切なお友達」

「あ、ああ」

抱き付かれたサイトはそれどころではなかった。ここ数週間、会えて我慢していたがもう限界である。
ふにふにぷにゅんぷにゅんと、音が聞こえそうな物体がサイトに当たる。

何これ柔らかいてかでけぇ！初めてあった時より若いのに既に乳神様として完成されていらっしゃる！おのれ許さん乳神様こんな怪しからんおっぱいおっぱいおっぱいおっぱいぃぃぃーー！

まさかそんなことを考えてるとは思わないティファニア。
タバサは長いつきあいから薄々不埒なことを考えているとわかり、そろそろ限界が訪れようとしていた。
そして――――。

「あの・・・私もシャルロットみたいに呼んで良いかな？さ、サイトお兄様」

思わず吹き出すサイト。

きょきょ巨乳の乳神様の妹！と妄想が際限なくなるサイトに遂にタバサが動いた。

「エア・ハンマー」

ドゴンと吹き飛ばされるサイト。

一体何人妹を作れば気にすむのかしらこのバカ兄は！しかも巨乳！などと思うも口に出さないタバサ。最後は違う恨みのようであるが。

「ちょっおまっ！」

「エア・ハンマー」

「ぬぁっ！待て！タバサ「エア・ハンマー」ふぎゃ！痛い「エア・ハンマー」止めて「エア・ハンマー」許し「エア・ハンマー」・・・・」

情け容赦ない攻撃に、遂にサイトが沈黙する。

「よ、容赦ないね」

流石のマチルダも唖然とする中、タバサは当然のごとく言い放った。

「お仕置きは必要」

冷や汗を浮かべるティファニアとマチルダ。
哀れにもサイトは、ガリアに帰っても報告を受けたイザベラに折檻されるのだが、今はまだ知らないでいた。

◆

カツカツカツ――――。

アルビオン王国のとある場所を歩く二人の人物。
一人は三十代半ばと言った所だろうか、高い鷲鼻に理知的な碧眼を持ちカールした金髪が印象的な痩せ形の男。
そしてもう一人は、先日ジェームズ一世に粛清を持ちかけた、あの薄い印象の男だった。

「国にお戻りになられるのですか？」

痩せ形の男――オリバー・クロムウェルは丁寧な言葉で先を行く男に話し掛ける。

「もう俺がいる必要はないだろう？これから先は貴様の仕事だ。なに助手くらいなら送りつけてやるさ」

先の印象とは違い乱暴な口調。
皮肉気に口元をゆがめ更に続ける。

「俺も国造りに忙しいんでな。貴様らが騒いでいる間に更に力を付ける必要がある・・・この国を乱すお遊びは貴様に任せる」

遊びと言い切った男に深く頭を下げるクロムウェル。
その先で、男の姿が変わっていく。
年の頃十五、六だろうか。あまりに若すぎる彼にしかし侮ることなどしない。
女性的ともいえる顔立ちに、銀色に輝く長めの髪。同色の瞳からは意志の強さを感じる。

「では最後に、我らの率いる隊にお名前をアレク様」

アレクと呼ばれた男は、いずれ大陸全土を揺るがす先兵の名前を振り向くことなく告げると闇に消えていく。
辺りに響く言葉を残して。

「レコン・キスタ」と――――。

第１２話（前書き）

若干壊れ気味で、えっちぃです。無理な方はスルーしてください。

第１２話

「日本のぉぉ科学力はぁぁ世界一ぃぃぃ！！」

「ここはガリアだけどね」

「せめてドイツっぽいゲルマニアにしようぜ旦那」

ガリアの何時もの部屋において、突如として叫び出すサイトに愛剣達が各々つっこみを入れる。

Ｕｒｉｒｉｒｉｒｙｉｌｌｉっ！と謎の唸りをあげるも、恐らくこの場の一人と二振りの剣にしか通用しないネタで謎の盛り上がりを見せていた。

「いったいどうしたんだ相棒？いつかはと思っていたが遂に沸いちまったのかねぇ」

ちがわいっ！と唇を尖らし言うサイト。

じゃあ何さと言うデルフリンガーによくぞ聞いたと語り出す。

「俺は思ったんだ」

「何を？」

「まぁ黙って聞けよ」

地下水にそう返し遠くを見つめる。

「ここ最近俺に対する扱いが酷すぎる」

そう言うと、涙を堪えるかのようにくぅっと上を仰ぎ見る。

「アルビオンから帰ってきたらイザベラからの謎の折檻」

いきなり『この妹好きの相姦魔ー！そんなに巨乳が好きなのかー！』と叫びながらボコボコに殴られたのは記憶に新しい。

「それに・・・今マチルダさんやテファが遊びに来てるだろ？」

彼女達は親善大使と言う名目で遊びに来ていた。
その二人を見た時のイザベラの顔が忘れられない。
マチルダもかなりの巨乳であり、そしてティファニアはそれを超越する乳神様。さして変わらない年のティファニアのそれを見て

『やっぱり巨乳がジャスティスなのか！うわぁーん！』

と泣きながら走り去っていったのだ。
勿論その日の晩は折檻された。
イザベラの単なる嫉妬なのだが気付く筈もないサイト。

「毎日毎日お国のために尽くしてるのに、全然報われねぇ」

昨日も折檻今日も折檻毎日折檻。折檻折檻折檻折檻。
シャルロットも混ざって、少しでもティファニアの胸を見たら強烈なお仕置きが強行される毎日。
折檻折檻折檻折檻折檻折檻折檻折檻っ！！

「革命じゃーーー！！」

サイトが理不尽な暴力に立ち上がった瞬間だった。
「いやぁ本格的に壊れたね相棒」
「それより何を作ってたのかを早く教えてくれよ」
全く止める気のない愛剣達だった。

◆

サイト達が無駄な盛り上がりを見せている時。
イザベラ達もまた話に花を咲かせていた。
イザベラにあてがわれた部屋にて紅茶を嗜む姫君達。
しかし、イザベラもタバサも心中は穏やかではなかった。

「外の世界がこんなに素敵だなんて思わなかった。サイトお兄様には感謝しなきゃ」

おおおおにぃさまぁ？
あんたのお兄様はウェールズだろ！と心の中でシンクロするイザベラとタバサ。
ヒクヒクと顔を痙攣させながら

「そ、そうかい？そりゃ良かったね」

と言うイザベラの視線はある一点に向けられていた。
巨大すぎるためかデンとテーブルに乗る二つの塊。
マチルダをもってして『あれには勝てない』と言わしめた物体を憎

々しげに見つめていた。
横に座るタバサは、己の胸を一生懸命に乗せようとしていたが、スカッスカッと空振るばかり。しまいには涙目で胸元を押さえる姿に、イザベラもまた泣きたくなっていた。
そんな三人を生暖かい目で見つめるマチルダは

（坊やも大変だね。ま、この三人に疲れた時はあたしが慰めてやるか）

と密かに企むのだった。

◆

ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべ廊下を歩くサイト。
すれ違う者達が皆一様に引いているのだが気付いていない。

「いい加減教えてくれ旦那」

痺れを切らしたのか地下水が急かす。

「仕方ねぇな。俺はね、この折檻折檻と言う理不尽な暴力と日々の疲れに嫌気がさしたんだ」

「知ってるよ」

デルフリンガーの素っ気ない相槌を気にすることなく続ける。

「潤いが欲しいんだよ。荒んだ心を癒す潤いが」

「なるほど。で？」

またも素っ気ない返しに、もうつれないなぁと呟きつつ先程から手に持つメガネを見せる。

「ふふ。これは右のボタンを押せば右目のレンズが透視を行い、左のボタンを押せば左目のレンズから魅了の魔法が放射されるミョズニトニルンで作り上げた最高傑作だ！」

自分の才能が恐ろしいと言うサイト。

「いやそんな事にミョズニトニルンの力を使う相棒が恐ろしいさね」

もっともなセリフのデルフリンガーだった。

なにおう！とプンスカするサイトだったが茶会を終えたのか目の前に現れたイザベラ達。

メガネをかけ、なるべくさりげなくと右のボタンを押しながら声をかける。

「よう！何してるんだ？」

サイトの言葉に振り向く女性陣。

ブハァァ！とその瞬間盛大に鼻血を吹き出すサイトに女性陣は引きながらも相手をする。

（うぉぅ！何このパラダイス！ちっちゃいのからおっきいのまでおっぱいの宝石箱やぁ！！）

内心で喝采を上げるサイト。しかし素知らぬ顔で二言三言話かける。本人は普通を装っているのだろうが、何故か鼻血を出し前屈みなサイトにイザベラとシャルロットは警戒心ありありである。

（怪しい。とくにあのメガネ）

イザベラ達が警戒するなかティファニアは疑うことなく嬉しそうに話す。

「サイトお兄様！毎日新鮮ですごく楽しい！ありがとう！」

「いやいや。兄として当然ダヨ。ハッハッハッ！」

怪しさ満点の対応に更に警戒心が増す二人。

（すげぇすげぇ何ですかこれは許されるのこれ神が許さなくとも俺が許さんでもサイコーれす！）

もはや只の変態だった。サイトから毒々しい電波を受信したのか、余程疲れていたんだなぁと切なげにため息をついたデルフリンガーと地下水の気持ちなどつゆ知らず、最後の行動に移ろうとするサイト。

（ふふ。次はこの左のボタンだ。俺にメロメロになるが良い！）

いざ決戦の時と気合いを入れて、左手を動かしボタンを押した瞬間

———ポンと叩かれた肩に思わず振り向くサイト。

愚かにも左目の効力を考えずに振り向いた視線の先にいたのは

「何をしておる？」

年齢不詳気味なガリアの国王ジョゼフだった。

「んぎゃゃゃゃっ！！」

見たくもないモノが頭に流れ込む。
何だあれ！ペペペットボトルみたいな大きさは！！きもっ！！
おぇっとえずきながら、絶望的な敗北感に見まわれたサイト。
しかし大事な事を忘れている。

「サイト・・・なんと言う愛らしさだ」

「「「「「へ？」」」」」

突然のジョゼフの言葉に理解出来ない女性陣。
そんな中いち早くサイトは理解してしまった。

（まままままさか！？）

脂汗を流してガクブルとするサイトに両手をワキワキと怪しい動きをさせながら近付くジョゼフ。

「もう辛抱たまらん！余はっ余はぁ！！」

「んぎゃゃゃゃっ！！」

ガバッと抱き付くジョゼフ。勿論サイトの目には真っ裸に写っていた。

「サイト！サイトぉ！」

激しく頬をスリスリとするジョゼフ。
サイトはあわわっ呻き気絶している。
あまりのカオスっぷりに固まっていたイザベラ達の中で一番早く回復したマチルダが、取りあえず絶叫しのだった。

「ジョゼフ陛下御乱心ーーっ！！」

暫くして、全ての事情を聞いたイザベラ達の目の前ではパンツ一枚で正座させられているサイトの姿。
体中アザだらけで顔が三倍ほどに腫れていて、首には【生まれてきてごめんなさい】と書かれた板をぶら下げている。
哀れだが自業自得だった。行き交う人達に切なげな眼差しを一身に浴びるサイトだが、流石に優しいティファニアもフォローはしなかった。

「何か言い訳はあるかい？」

「ありまふぇん」

「お前はなんだい？」

「いぬれふ」

顔が腫れて上手く話せないサイト。
マチルダは肩を揮わせて笑いをこらえている。
ティファニアはイメージが崩れたのか俯き、シャルロットはサイトの額をコンコンと杖でつつく。

「まぁ何時も通りの終わりかただな」

そんな光景に呟くデルフリンガーに、そうなんだと妙に納得するマチルダ。

後日、ショックの為にジョゼフは寝込み政務が滞りまたサイトとジョゼフの熱愛説が宮殿に巻き起こるのだが別の話である。

◆

「日本のぉぉアニメはぁぁぁ世界一ぃぃぃ！！」

「もう良いって相棒」

「やめようよ旦那」

暫くして、また潤いがないと今度は製本技術を上げて漫画や小説などのえっちぃ本を作り上げるのだが、当然のごとく折檻される姿があったそうな。

第１３話

時の流れは無情で、様々なモノを置き去りにし、またその置き去りにされ空いた空白に新たな絵が描かれる。
かの浮遊大陸の事件から一年近くが過ぎた。
その間にアルビオンで突如沸き起こった反政府組織【レコン・キスタ】
エルフを王家に入れたジェームズ一世に対して、始祖ブリミルに従い天誅を下す。しかる後真なる貴族が治める共和制に移行し、悲願である聖地奪還を唄う。
そのリーダーであるオリバー・クロムウェルがロマリアにて司祭の肩書きがある事が判明し、そこをついてヴィットーリオからティファニア達の安全を確保出来たのは、幸いだったのだが、やはり反乱などはない方がよい。国の威信や信用問題にも関わり、争いで低下した国力を取り戻すのは並大抵のことではない。また、いくらヴィットーリオから免状を得たとしても、エルフを王家に入れたと揶揄する彼らからの心のケアにも取り組まねばならない。
もっともティファニア達の美貌やその物腰の柔らかさや生来の優しさに触れた、民や貴族達は予想以上に好意的だったのは救いであった。そしてもう一つ。
先日、つい数年前までは名前すら知られていなかった国が怒濤の勢いで幾つかの国を呑み込み、また同盟を結び強化し《マケドニア大王国》を樹立、その名をハルケギニア全土に知らしめたのだ。
大王国となのる通り、我こそは王の上に立つものであり当然始祖の血も引いていると宣言するマケドニア大王国。実際のところ六千年もの年月の間に、他国へ嫁いだり降嫁したりまた出奔する王族が数多く存在するのは事実であり、それを真正面から否定する材料はない。
ただ先の事があり、警戒するガリアとアルビオンは大王と言う名に

遺憾の意を表明。またゲルマニアもその成り立ちがマケドニアと同じく小国を呑み込み生まれた国であるため、かの国の行動に目を光らせている。
例外はトリステインとロマリアのみ。
前者は、所詮成り上がりの蛮人の戯言と現実を見ずに日和見、一番五月蝿そうな後者は何か取引でもあったのか不気味な沈黙を保っていた。
兎に角、要警戒が必要な国ではあったのだが現在は表向きは友好を示しており手が出せず、また特に問題が起こらなかったために、取りあえずはマケドニアやその王に関する情報収集に時間はすぎて行っていた。
そのマケドニアにて、同じ名を冠する王宮の一室。

「アレク様・・・ようやく此処まで来ましたね」

以前サイト達の前に現れたローブ姿の人物が、主上の男に話し掛ける。

「違うな。まだここまでしか来ていない」

「そうでございましたね」

アレクと呼ばれた男――マケドニア大王国にて、アレクサンドロス大王と名乗る少年は、言葉を続ける。

「本来ならば、もう少し国を拡大したかったんだが・・・流石はジョゼフ。俺が知っているときほど牙はないと思っていたが、やはりその頭脳は健在だったみたいだな」

マケドニアが怪しいと踏んだジョゼフの様々な妨害工作。幾分ジョ

ゼフは出遅れ気味だったのだがそれでも当初の予定が狂っている。
「まぁ、そうでなくては面白くない。まだまだ物語は序章にも達っしていないからな。劇が始まるのはまだ先だ」
それまで精々足掻けよと付け加えると彼は、窓の外を見つめる。
その景色の向こうに何が見えたのか、今はまだ誰も知らなかった。

◆

ガリアに勇者有り――。
彼の者がその力強さで剣を振るわば竜の巨体も意味をなさず、華麗な剣舞はエルフさえも魅了する。
【ガリアの剣】または【王剣】イーヴァルディの名は今や広く知られている。
他国の者は眉唾だったり、情報の遅れ故知らない者もいたのだがガリアとアルビオンでは違う。
共に巨大な敵を退け陰謀を阻止した英雄として、今や劇の演目にまでなっていた。
特に平民達にはサイトは大受けだった。
庶子――平民が出自とあり、更に王族で有りながら単身様々な問題に剣を振るう。また彼の知識から始まった各種改革で豊かになり平民達の立場を向上している。まさに物語の英雄に相応しい彼。
実際の所その素顔を知る者は殆どいないのだが、そうなると想像が膨らみ更に期待が増す。
巷では絶世の美少年とまで言われ、その話を聞いたサイトはもう街に出れないと嘆いた程だった。またそんなサイトの努力のかいがあってか、当初困難を窮めていたオルレアン公夫人――タバサの母の

病も幾分改善されいる。狂人のように発狂することもなくなり、今は記憶喪失状態にまで落ち着いている。勿論、記憶喪失などはない方が良いのだが現状ではこれ以上ないほどの回復であり、タバサも現状にひとまず胸をなで下ろしていた。
現在彼女は、マケドニアやレコン・キスタなどの内情を探るためにトリステインにいる。年頃的にも学校に通う時期に来ており、またそれならば現状アルビオンの次に危ういだろうと思われるトリステインに魔法学院の生徒として入学したのだ。
もしもの際のために、護衛として恩を返すために、マチルダが――今はロングビルと名乗り学院にて秘書の任に付いている。このことを知るのは学院では、学院長であり大賢者とも謳われるオスマンただ一人であった。
兎に角、ガリアを離れなければなずなかなか会えない事に悩んでいたタバサは、母が記憶喪失とは言えど持ち直した事により安心してトリステインに赴いているのだった。

そしてタバサは――――。

◆

トリステイン魔法学院に入学して幾日か過ぎていく。タバサは密偵として正体を証す訳には行かず、また誰かを巻き込むのは許されないと思い一人で行動し誰ともなれ合わない日々が続いていた。幼い頃より好きだった本にのみ関心を示し、その姿に心配したマチルダ――ロングビルが度々話かけるくらいだ。
いつも本を読み一人でいる。しかもタバサ以外の名前を教えない彼女が学院で浮くには時間はかからなかった。
たまに何が気にくわないのか、赤髪の露出狂がちょっかいをかけて

くるくらいで、それ以外は何も問題はない毎日。
それなりに満足していた学院生活が変わり始めたのはある授業でのことからだった。

◆

「私の名はギトー。二つ名は【疾風】だ。皆も知っての通り風のスクエアだ」

タバサが振り分けされたクラスは、ソーン。
他にイルとシゲルがあり共に伝説的な聖者の名前が付いている。
そのタバサのクラスにて教壇に立つ陰の隠った感のある不気味な男はそう名乗りを上げると、続く言葉で生徒達を冷たく笑う。

「今年の新入生は不作ぞろいだ。ほとんどがドットメイジ。ラインが数名でトライアングルに至っては誰もいない」

君らは何をしていたのだ？と蔑むかのような尊大な態度に生徒達はざわめくも、相手は教師でありスクエア。すぐに落ち着きを取り戻し、それを確認したギトーは授業を始める。

「やるだけ無駄だろうが、これも仕事だ」

一言も二言も多い彼は、風の基本形たる《フライ》と《レビテーション》の模範を見せ生徒達に実践させる。
ここでタバサが活躍した。
書類上はドットとして入学しているが、その実、風と水のトライアングルである彼女に取って児戯にも等しいスペルであり、誰よりも早く高く飛んでいった。

もちろんそのままエスケープしたのだが、ギトーはドットがあれほど上手くいくのかと首を捻り責めませず逆に

「あのような小さな子でもあれほど巧く風を操る。君たちは恥ずかしくないのかね？」

逆に生徒達をあおる始末で、その言葉に歯噛みする男子生徒がいたのだが誰も気付かなかった。

「つまらない」

フライを唱え、授業を離脱したタバサは空を滑空しながら呟いた。自己主張が強いだけの、バカな貴族の子弟に勘違いしている教師。ここが内外に有名な魔法学院とはとても信じられない。

（学院などには来ずに、兄様といれば良かった）

将来の布石のためにと起こした行動なのだが、それが悔やまれた。最近お気に入りの中庭にある一本の木に近付くと、ふわりと降り立ち背中を預け座り込む。

「また暫くは逢えない」

それは、サイトかはたまた両親なのか。答えは続けずに本を開くとタバサは世界から隔絶した。

◆

「ミス・タバサ。あなたに風をご教授願いたいのだが」
どれほど時間がたったのか、本に集中していたタバサに話し掛ける声。
しかしタバサは聞こえていないのか、相手にする気がないのか一向に本から顔を上げない。
「人がものを頼んでいるのに、無礼ではないのかね！」
（うるさい）
無礼なのはどっちだ。お前の考えなどわかっていると内心思う彼女。声からして、風の高名なメイジを輩出してきたド・ロレーヌのヴィリエだろう。
彼も他の生徒達とかわらず、いやそれ以上に自尊心の高い男だと言うのは調べて知っていた。
（相手にするだけ無駄）
そう考え《サイレント》を唱えようとした時、タバサの耳に許されざる言葉が届いた。
「ふん！練習と試合は違うと理解しているようだな。しかしとんだ臆病者なんだなガリア人と言うのは！」
黙り込むタバサが怯えていると勘違いしたヴィリエ。彼は止まることなく言葉を連ねていく。
「そう言えば、ガリアには剣を振るうしか脳のない王族がいるらしいな」

ピク――――。タバサの表情がわずかに揺れる。

「まぁ、王族と言っても所詮は平民混じりの出来損ない。勇者などと嘯くしか出来ない奴の国の人間だから君も臆病者なのかもな！」

コイツは何を言っている？自分が口にした言葉の意味が分かっているのだろうか？

不敬罪、下手をすれば外交問題にまで発展するかも知れない内容なのだが、彼にそんなことを考える頭などない。

ヴィリエの言葉に心が熱を持ち始めるタバサ。

「それに君。どうせ母親の名前も知らない私生児なのだろう？捨てられたのかい？平民の王子がいる国に相応しい母親だな！」

ざわぁ――――。

ヴィリエの肌が一瞬総毛立つ。

な、なんだと訳が分からない彼にゆらりとタバサが立ち上がる。

もう限界だった。自分を悪く言われるのならばいくらでも耐えられる。しかし――――。

（こいつは兄様と母様を侮辱した）

決して許されない言葉を吐いた彼に、タバサは氷よりなお冷たい視線をヴィリエに向ける。

「後悔させてあげる」

ゾッとするような声音。ヴィリエは一瞬腰が引けるも、勘違いだと思い声を高らかにあげた。

「その言葉そっくりそのまま返してやる。決闘だ！」

◆

ざわざわと揺れる人垣。その中心にタバサとヴィリエがいた。
互いの距離は十メイル程。
決闘などなかなかお目にかからない新入生達は、今か今かと待ちわびていた。

「君のような庶子に名乗る謂われはないのだが、これも作法だ。ヴィリエ・ド・ロレーヌ謹んでお相手つかまつる」

ヴィリエの言葉にいよいよかと力が入る生徒達。反対にタバサは名乗りもせずヴィリエを睨むのみ。
どうした！恐いのか！と周りからのヤジ。どう見てもこの小柄な少女が勝つとは思えない生徒達は声を上げる。

「くっ！どこまでも無礼な奴め！這い蹲るが良い！」

そう吠えたヴィリエが素早くスペルを唱える。
放たれるは《ウインド・ブレイク》
ド・ロレーヌ家の者だけはあり、学園でも数少ないラインメイジの彼は所謂所のエリート。
その魔法の速さと威力で自身の勝利を確信していた彼だったが、タバサが軽く杖を振るう。

ただそれだけでヴィリエに自身が放った烈風魔法が返された。

「うわぁぁぁ！」

二転三転と転がるヴィリエ。いったい何が起きたのか理解出来ない彼は何とか起き上がろうとした時、目に理解できないモノが写り込む。

「ひぃ！？」

――《ウィンディ・アイシクル》――

トライアングルクラスのそれがヴィリエに襲いかかる。

ズサズササササ！と幾本もの氷の矢がヴィリエの服を壁に縫い付け、彼の股間からは恐怖のためか濡れて行き、同時に彼を張り付けていた氷も溶ける。

ざっざっと無言で近付くタバサに

「ままいった！降参する！だから近付かないでくれ！」

顔をゆがめて、懇願するヴィリエ。

高いプライドをかなぐり捨てて喚く彼にしかし、タバサの歩はとまらない。

「じ、冗談だ！さっき言ったことは謝る！命がけの試合なんて今時はやらないだろ！」

「・・・・・」

「許して！許して下さい！何でもします！だからっ！」

その言葉と同時に、ヴィリエの目の前まで来たタバサは右手を振り上げる。

「ひぃやぁぁっ！？」

ビクンっと体を縮め、来るだろう衝撃に待ち受けるヴィリエ。
しかし、いつまで経っても来ないそれに恐る恐る顔を上げると

「落とし物」

ヴィリエの杖を手渡すタバサ。
あ、ああと頷き助かったと思った彼にタバサはポソリと呟いた。

「次はない」

ひっ！？と硬直するヴィリエを置き去りにし、立ち去るタバサにわぁっと歓声が上がる。
予想外の結末、しかもその圧倒的な力に生徒達が酔いしれたのだ。

「すごい・・・いつかはわたしだって」

そう呟き、でも何処かで見たようなと首を捻る桃髪の少女と

「やるじゃない。でもまぁ、気に入らないわね」

いずれ無二の親友となる赤髪の少女。
彼女達が混じり合うには、まだ幾ばくかの時間が必要だった。

第１４話（前書き）

ちょっとした日常の１コマです。

第１４話

タバサが新たな生活を迎え、生涯の友との出会いを迎えようとしていた頃。
ここガリアにおいても、春先から配属された新人達が様々な出会いを交わし、杯を掲げ肩を組み切磋琢磨し己を磨いていた。

【プチ・トロワ】の施設訓練場。

幾人もの衛士達が見守る中、対峙する一対多の人影。
この日サイトは、イザベラに頼み込まれ新人衛士達の訓練を直々につけていた。
そんな偉そうな立場にはいないと一度は断ったのだが、唯一の《王の剣》たるサイトにと願う者達が多いらしく押し切られてしまったのだ。
中には、剣だけだと高をくくるものやあわよくば王族たるサイトに取り入ろうと考える者もいたようだが。

「はあぁぁぁ！」

タンっ！と地面を蹴り上げる軽やかな音が聞こえたと同時、目の前にて剣を構えていた若者に近接する。

「！？」

反応する間もなく懐に踏み入れるとサイトは、デルフリンガーを振り下ろす。

「うわぁぁぁ！」

キィィィン！と金属が弾ける音。
サイトの剣戟に耐えきれなかった彼は体制を大きく崩し、続けざまに襲い来るデルフリンガーの柄で鳩尾を殴られ倒れ込んだ。
いかに盛況を誇るガリアの軍人でも新人故の悲しさか、同僚が倒されたと言うのに彼と組んでいた衛士達は、未だスペルの一つも唱えれていない。

「ひゅっ」

だが待つ積もりなど欠片もないサイトは、棒立ちの彼らに襲い掛かる。

一閃二閃三閃――――。

煌めく刃が、次々に彼らを打ち倒す。
全く対処が出来ないまま倒れていく仲間に、見学者からはブーイングが巻き起こるが、彼らとてこの場に立てば同じだと言うことは自身が一番良く理解している。
恐らく、まともな剣技など今まで見たこともなかったのであろう。
どの国でもそうだが、貴族はメイジでありメイジは魔法を至高のものとして考える。
剣のような野蛮な物は平民が扱うもの。
そう考える者がほとんどだ。もっともそれは軍に入れば甘い考えだと知らされるのだが。
更に、サイトの剣技はガリアいやハルケギニアの剣技とは根本が違う。
純然たる日本の剣術。

中世から近世にかけて、諸外国の騎士が日本の武士や彼らが持つ日本刀に恐怖した時代があった。
一説には最強とも言われたそれは、流派によれば人の身で神や魔を滅するまで昇華されている。

その道に入り、技を持って人を超え、術を極めて神をも滅する。

剣道――剣技――剣術と学んだサイトのそれは、一般人には理解できない。

今度こそ理不尽な死を迎えないため、今度こそ愛する者と共に居るためにと学び、二度目のこの世界においての数々の修羅場を経験することにより、更に磨きが掛かっている。

「おでれーた」

振るわれながら呟くデルフリンガーは、サイトの強さに改めて感嘆の声を挙げる。

実力は十分に知っていた。

「でもガンダールヴじゃないのにこれかい」

単純な速さと技量だけなら、在りし日をとうに凌駕しているサイト。
故にガンダールヴじゃないのが悔やまれる。

もったいねぇ・・・これが最近よく考える思いだった。

――――キン。

背中の鞘に納刀される音が涼やかに響く。
サイトが攻撃を仕掛けて僅か数秒足らず。
結局彼らは何も出来ず、ただただ圧倒的な力に呆然として、改めて【イーヴァルディ】の伝説をその身をもって体験したのだった。

◆

出番がなかったとゴネる地下水を宥めつつ、訓練場から中庭へ続く廊下を歩くサイトに、どこかで見ていたのかイザベラが声をかけてきた。
「ご苦労だったね。まぁあれじゃ訓練にならないだろうけど」
ただ一方的な力で瞬殺しただけなのだ。訓練とは呼べないだろうそれに、でもまぁいい薬にはなっただろうねと続ける。
「魔法だけが全てじゃねぇからなぁ。世の中にはメイジ殺しなんて呼ばれる剣豪もいるし、魔法と武術を極めた戦闘特化型のメイジもいるしな」
「そうだね。今のうちに頭でっかちな考えを矯正する必要があるからね」
イザベラの歩幅に合わせながら歩くサイトに、嬉しそうに頷き返す。
（朴念仁に見えて、何気に紳士なんだよね）

チラチラっとサイトに気付かれぬよう横顔を覗き込む彼女。
ちなみにデルフリンガーと地下水にはバレバレである。
そうとは知らず、頬を赤らめ先程のことを思い返すイザベラ。

（かっこよかった・・・）

稟とした空気を纏い、数多の戦場を駆け抜け来た事を告げるかのような引き締まった表情を見せたサイト。
その目にも留まらぬ剣速は、傍目には剣舞を待っているようにも見えて美しかった。
普段が普段なだけに、ギャップが相俟ってイザベラの瞳に映るサイトの姿は三割り増しに輝いていた。

はふぅ。と切なげに溜め息を洩らすイザベラはサイトと会話を続けながらも思考する。

（今はまだガリアにいるおかげで、なんとかメイドやらシャルロットから魔の手を塞ぐだけで済んでるし、あの乳お化けとその姉は今はアルビオンだから大丈夫）

脳裏に彼のファンのメイドとかメイドとかメイドとか、妹とか乳お化けとか年増などが思い浮かぶ。

でも、いずれはガリアだけには留まらなくなるだろう。
今でさえアルビオンにまでサイトを狙う女狐がいる。
これ以上相手が増えたら堪らない。

（でも、一応抜け駆けはしないって協定を結んだしねぇ）

以前、親善大使としてティファニア達が訪れた時秘密裏に交わした約束を思い出す。

「どうしたもんかね」

「ん？何だよイザベラ？」

ふと声に出してしまった呟きに訝しげに訪ねるサイトに曖昧な笑みで誤魔化すと、結論を後回しにすることにした。

「あんた将来、女泣かせになるよ」

ちょっとした腹いせに意地悪な笑みを浮かべイザベラが告げる。

「はぁ？何だよいきなり。意味わかんねぇし」

いきなり告げられたら言葉に眉をひそめるも、大体俺モテねぇもんと口を尖らし拗ねるサイト。

先程の凛々しさとは違った愛らしさを見せ、それがまたイザベラのハートにズキュンっ！と直撃する。

「今はわからなくても良いんだよ。ただ・・・」

そう言うとギュッとサイトの右腕に捕まり、「お、おい！」と焦り照れる彼の腕を胸に抱きしめ囁いた。

「あたしは一番目にしておくれ」

零れた想いはサイトの耳には運ばれず、また敢えて教える気もないイザベラ。

今この時は誰も邪魔をしない――。

たとえそれが束の間の安息だとしても何よりも代え難い彼女だけの甘い時間。

彼女はそれで十分だとばかりに更に掴んだ右手を胸を押し付ける。顔を真っ赤に染めそっぽ向くサイトを愛おしげに見つめると、今この時の幸せをイザベラは噛みしめていた。

第１４話（後書き）

ストックが遂に尽きてしまった。
今までよりも投稿は遅くなるかもです。

第１５話

「はぁ？・・・タバサが決闘？」

『ああそうさ。相手はド・ロレーヌのバカ息子さ。まぁ瞬殺だったけど。あんなのと同じ貴族とは思われなくないもんだね』

ロングビルからの定時報告を受けていたサイトは素っ頓狂な声をあげながら、過去の記憶のページをめくってみるがド・ロレーヌとの決闘は見当たらない。

（てことは、俺の知らない決闘話かな？）

そう考え理由を尋ねるとサイトと母親を侮辱したらしいと告げるロングビル。

はぁと溜め息を漏らしながら経緯を聞くサイトとロングビルをつなぐ会話の元となる物。

それは目の前で身振り手振りで話す《アルヴィー》だ。

サイトが携帯電話を模して考え出した物だ。

ミョズニトニルンとして造り上げた小型魔法人形のそれに、互いの血や魔力を覚えさせる事により通話を可能にしたそれは、しかし未だ本格的な実用化には至っていない。通話距離や登録できる人数、そして莫大なコスト。

特にコスト面においては笑えない金額であり、ちょっとした城が買えてしまう金額だ。

だが、真に普及にいたれない理由は敵対する自他国合わせた諜報員による情報漏洩や、他国の軍隊がこれによりスマートな指揮系統に収まるのを畏れてのことだ。

たかが携帯電話擬きと言えども、この世界においては革命的なもの

であり目敏いものならは使用用途は単なる通話のみにはならないだろう。
しかも地球の携帯電話とは違い、純然たる魔法の産物であるこれは通話記録など保管できない。
まさにやりたい放題なのだ。
対策が出来るまでは、一部の関係者以外は使用不可。
これがサイトとジョゼフの見解だった。

「ま、終わったことはともかくアルビオンは良いのか？」

アルビオン――――昨今何かと話題に上るかの反乱軍の話を持ち出す。

『あたしが彼処にいても出来ることは限られているからね。ならここで情報を集めつつ嬢ちゃんを守ってる方が良いさ』

ま、本格的にやばくなったら戻るけどねと続けられたら言葉に、サイトもティファニアの事があるためか頷く。

『そうそう、決闘が終わったって思ったみたいだけどまた何か起こりそうだから』

「へっ！？またって？」

『フォン・ツェルプストーの娘と何か危険な雰囲気なんだよ。一応あたしの方でもなんとかするけど、下手したらまた決闘かもね』

ツェルプストー。その名を聞いて脳裏に浮かび上がる燃え上がるような赤髪の少女。

ああ、その事件なら記憶にある奴かもと思う。

だが、確かこの事件があったからこそあの二人が強く結ばれたと記憶しているサイトは口出しして良いのか悩んでしまう。

『あんたもそっちばっかりに腰を落ち着けるんじゃなく、たまには学院に来たらどうなんだい？嬢ちゃんも喜ぶよ？』

「学院かぁ。でもなぁ・・・」

いまだ褪せることなく、いやアルビオンにてルイズとの束の間の会合にて再燃したルイズへの強い想い。
今の俺が学院に行っても良いのかと唸る。

『たまには息抜きも必用さ。なんならあたしが溜まったモノを吐き出してやるよ？』

ぶほぉう！とロングビルの耳にサイトの咽せ声が届き、見えないだろうニヤニヤ顔を隠すことなく笑いながら話す。

「おやぁ？何を想像したんだい？あたしは心に溜まった鬱憤をお茶でもして吐き出してやるよって言ったつもりなんだけど」

『やかまし！わかってるよ！とりあえずタバサの事は考えとく！じゃあな！』

サイトの焦った物言いが終わると沈黙する《アルヴィー》。
それを見ながら、くっくっくと肩を振るわせると呟いた。

「あたしはベッドの上での語らいでも良いいんだけどね。坊や」

もし来るなら本気で誘惑でもしてみるかと、少し気合いを入れた彼

女は少女のように浮き足立つのだった。

◆

この日件の少女――――キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーは不機嫌だった。
いついかなる時も余裕の笑みを浮かべる彼女にしては珍しい光景。
褐色に輝く肌に、１７１サントの高い身長に付随するかのようなメリハリあるボディ。
いつもならすれ違いざまに誘惑する男子生徒達を無視し肩を怒らせ校舎を歩く。
怒りの矛先に選ばれたのは、ロングビルの報告にあったタバサ。
脳裏に小柄な蒼髪の少女を思い描き、この怒りをどうするかと考える。
始まりは入学式。
たまたま隣にいたタバサに話しかけ無視されたのが始まりだ。
もっともあの頃は気に食わないと思いながらも、そこまで意識しなかった。
次にヴィリエとの決闘を見た時。
火のトライアングルである自身に匹敵、もしくはそれ以上の魔法の力を振るう彼女に不覚にも、一瞬だが見惚れてしまったのだ。
自分が格下と侮っていた人物に見惚れる。
僅か一瞬でもキュルケの矜持を傷つけるには十分。
そして最後は――――先日行われた舞踏会。
そして味わった恥辱。

「この《微熱》のキュルケ。いただいたものはキッチリと返す主義よ。《雪風》のタバサ」

言葉にした相手。しかしそれが彼女達を貶める罠とはこの時はまだ、気づいていなかった。

◆

ことの発端は、新入生歓迎会として行われた舞踏会。
ウルの月の第二週、ヘイムダルの週の週末に起こった事件。
社交界に慣れない新入生達のドレス姿やダンスの下手さが目立つ中、キュルケは別格だった。
ゲルマニアの社交界を賑わせたこともある彼女。
ふんだんに色気を発し、匂い立つ花のような美貌。
黒のきわどいパーティードレスで身に包み、髪は今流行りの形に結い上げ情熱のように赤いルビーを首から下げている。
そんな彼女が注目を浴びるのは当然の結果であり、それを示すかのようにキュルケに群がる男達。

「うふふ。あらありがとう」

次から次ぎへと奉仕される姿は女王のようであり、彼女もまた当然と言った態度。

そんなキュルケに苛立たしい視線を向けている少女達がいた。

「きぃ～！何なのよアイツ！」

トネー・シャラントは灰色がかった髪をかきむしり歯噛みしながら地団駄を踏む。

「やっぱり例の計画を発動するしかないわね。見てなさい！あんたの栄華も今日までよっ！」

彼女を取り巻く少女達も一応に頷く。

トネーは少し離れたカーテンの陰に隠れているヴィリエに合図を送る。

キュルケを恨む彼女達が、タバサへの復讐を企むヴィリエを巻き込み計画が発動された。

たくさんの自称紳士に囲まれていたキュルケに、つむじ風が纏わりつく。

それはやがて無数の刃となり彼女のドレスを下着諸共切り刻む。

突如の魔法行使に理解が追いつかないキュルケと取り巻き達。

やがて悲鳴や呻きが湧き上がる。

どうよとばかりに見るトネー達だったがしかし、キュルケはやはり別格だった。

衆目にさらされる体を惜しみもせず動じない。

「暑かったのよね。これで涼しくなったわ」

そればかりか逆にその見事な肢体を誇るかのように、壁際のソファーに歩き出す。

勿論、内心は怒り狂っている彼女。

何かと誤解されがちではあるが、以外に身持ちは堅いのだ。

「災難だったね。これで体を隠してくれ」

あれは風の魔法よね。一体誰が？と悩むキュルケに近寄るヴィリエ

が、外したカーテンをキュルケに手渡す。
「あらありがとう。これはこれで良いかもね」
体に巻きつけ、即席のドレスとしたキュルケ。
「あなた・・・確かタバサとか言う子と決闘した人よね？」
「うっ・・・。そうさ。恥ずかしながらこてんぱんに伸されたがね」
思い出したくもない恥を抉られるヴィリエ。
だがしかし幸いと話を続ける。
「彼女に対する言い掛かりとかではないんだが、どうも彼女らしき人物が杖を振るったのが見えてね」
この会場では、魔法は禁止されているので杖の持ち込みは有り得ない。
なのに持ち込んでいたタバサは怪しいと告げる。
「はっきりと見たわけではないんで確証無いのだが、彼女は普段何を考えているかわからない人物だしね。名前を聞いただけで決闘を申し込まれたし。先の決闘もその事が原因だ」
「たしかによくわからない子よね」
そう言えば、以前あたしも彼女の名前をからかったっけと思い出す。
そして、幾つかの接点からタバサの人物像を描くキュルケ。
キュルケは本来は思慮深く頭がいい。
タバサの仕業などと、いつもなら思わないだろう。

だが、いくら大人びていても所詮は少女。怒りと羞恥に乱されれていたキュルケは、安易にタバサを犯人と決めつけてしまった。

（どう言うつもりか知らないけど、タバサね。面白いわ）

獲物を見つけた猛禽類のように目を細めると、彼女はいつの間にか姿を消したタバサに向けて楽しげな笑みを浮かべたのだった。

そして話は戻る。

怒りを押し殺しながら、目的地の食堂にたどり着くと、タバサを目敏く見つけ隣に腰を下ろす。

しばらくの沈黙の後に、キュルケが口を開いた。

「随分と粋な復讐を考えたのね？」

「知らない」

「あのドレス高かったのよ？」

「私じゃない」

関係ないとばかりに簡潔に終わらせると席を立つタバサ。

トネー達はそれを見て次の計画を発動させる為に行動に移すことにした。

その姿を怒りの眼差しで見るロングビルに気付かずに。

◆

放課後、自室に戻ったタバサは部屋の惨状に目を見開いた。
部屋自体は大したことはない。
だが彼女の唯一の友達と言っていい書籍が並んだ本棚が焼き尽くされていたのだ。
サイトに入学祝いの一つとして貰った本も焼け焦げている。

「・・・・・・」

あまりのことに体が震えるタバサは、ふと本棚の近くに落ちる長い髪の毛を見つけた。
自分ではあり得ない色と長さ。
タバサが纏う空気が吹雪のように凍てついていく。
彼女もまた、キュルケと同じ様に冷静に判断できていなかった。
すぐさまキュルケの部屋へ向かうと扉をノックする。

「その顔。どうやら決めたみたいね」

タバサの表情に、望むところとばかりに扉を開けたキュルケが言う。

「場所は？」

「どこでも」

「時間は？」

「今すぐに」

短いやりとりのなか、キュルケは満足そうに頷くと決闘にふさわしい場所を口にした。

「ヴェストリの広場」

コクと首を縦に動かしたタバサを連れ立って、ヴェストリの広場に向かうキュルケ。

そこは先日タバサがヴィリエと決闘した場所でもある。

「あら？誰かしら？」

闇夜に浮かぶ月明かりに照らされて、そこに誰かが立っているのがわかる。

（これから決闘と言うのに無粋な人がいるものね。とりあえず御退場を願いましょうか）

謎の人物に近寄るキュルケ。

歩み寄る事により、その人物の全体像が見え始める。

性別は恐らく男だろう。身長は１７０サント程。

何処の貴族だろうか、そこらの貴族階級では身にまとえない生地を誂え、纏うマントも超一級品。あたりが暗いためにそれくらいしか分からないキュルケだが、それがわかるだけ体したものである。

しかし、彼女が考えたのはこの学院にこのような人物がいたかということ。

それに――――。

「なによそれ？あやしすぎるわよ」

顔にはめられた謎のお面を見て言うキュルケに、タバサが口を開いた。

「仮面ライダー」

「はぁ？」

いつかサイトが話してくれた物語に登場した、勇者の名前。
サイトにせがんで作って貰ったお面と同じそれに、まさかと思いながらも口にする。

「兄様？」

「おー。やっぱわかるか？」

呑気な口調で告げるサイトに、力が抜ける。

「どうして？」

「まー色々あってな。とりあえず決闘するんだろ？俺が立会人になるからさ」

色々――――ヴィリエ達の陰謀に気付いたロングビルに連絡を受けたサイト。
当初は、過去の通りだからと思ってたのだがロングビルの怒りの声音に負けて、急遽飛んできたのだ。
会議中だったため、王族まるだしの服装に武器は隠し持つ地下水のみ。
あまりに無防備な彼は、だが気にしない風に話す。

「わけあって顔は見せれないし、詳しくは話せない。だがミス・ツェルプストーに決して不利になるような審判はしないと誓う」

普段の口調より若干堅い話し方。

あまりの事に固まっていたキュルケは、呼ばれた名前に正気を取り戻す。

「兄様って・・・。ま、まぁ良いわ。詮索はしない。時間も無いことだし始めましょうか」

「わかった」

考えても仕方がない。今は目の前の問題(タバサ)を片付けるのみと、向き合う両者。キュルケやタバサが睨み合う場所から、少し離れた茂みの裏。

ここでもサイトの登場に混乱する一団がいた。

言わずとしれた、トネー・シャラント率いる少女達とヴィリエだった。

計画が巧くいき、あとは共倒れするのを見るだけと喜び勇んでついてきたのだ。

「どうなってるのよ」

「僕が知る訳ないだろう？計画が漏れたのか？」

「まさか！大体何でタバサのお兄さんなんかが」

「だから知らないと言ってるじゃないか！」
茂みで言い合う彼女達。サイトはその研ぎ澄まされた感覚で、彼女達の存在を捉えていた。
（やっぱ見に来ているみたいだな）
言い争いまではわからないが、存在は確認できたサイトは気配を探りながらさして問題ないと見るとキュルケとタバサに視線を合わせた。
「まずは謝罪を申し上げるわ。あなたの名前をからかったこと・・・悪気はなかったのよ。でもほら、あたしってこんな性格じゃない？ついつい人の神経を逆撫でしてしまうようで」
話し掛けるキュルケに、タバサは油断なく杖を構える。
「でも、あそこまで恥をかかされるとは思わなかったわ。だから遠慮はしませんことよ」
そう言い放ち胸の谷間から杖を出し振るうと、ごおぉぉぉっと燃え盛る炎球がタバサに襲いかかる。
それに合わせたかのような氷の壁が進路を塞ぎ、だがしかし勢いを完全には殺せず壁を溶かすと、タバサの髪を幾つか焦がす。
「次はこっち」
受けから攻撃に転じるタバサ。
大きな杖から放たれたのは《ウィンディ・アイシクル》。
ヴィリエとの決闘時に放ったそれよりも、数段上の氷の矢がキュル

ケを襲う。

「はあぁぁっ！」

負けじと氷の矢に炎をぶつけるキュルケだが、その内の一本が彼女の頬を掠め、血を流させた。

実力伯仲の両者の戦いに、ヴィリエ達は何時の間にか言い争いをやめ固唾をのんで見守る。

巧く共倒れになるかもしれない。

だがしかし、その期待は崩れ去ることになる。

両者が杖をおろしたのだ。

「え？なんで？」

「なんだ？どうなっている！」

混乱する彼らをよそに、二人が歩み寄る。

「勘違いしてたみたいね。恥ずかしいわ・・・ごめんなさい」

深く頭を下げるキュルケに首を横に振るタバサは、懐から一冊の本を取り出した。

「あ・・・俺があげた本じゃないか。すげえボロボロだなぁ」

目敏くと判断したサイトに、お兄さんの？と言いながら確認する。

「あたしじゃないわ。人の大事な物を奪うのは好きだけど、本当に大切な一番は奪わないもの」

笑いながら、タバサを見ると彼女を抱きしめる。
むぎゅうと胸に顔を埋めるタバサに、羨ましいと思いながら口にはしないサイト。

「どうして？」

苦しげに疑問を口にするタバサに、これが本来の彼女の顔なのだろう。慈愛の隠った表情を見せる。

「あなたって可愛いからよ。あたしのお友達になってくださらない？」

「お友達？」

「そうよ。あたしキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーのこの学院初めてのお友達に」

その言葉に、コクコクと首を縦に動かすタバサ。
彼女とて、本当は友達が欲しかった。
今は仮面で隠しているが本来は人一倍甘えん坊なのだ。

「私もこの学院で初めてのお友達」

ぎゅっとキュルケに抱きつき口にするタバサを、サイトは微笑ましげに見つめる。

「じゃあ、後始末しなきゃな」

そう口にすると同時に、地下水を振るい力ある言葉を紡ぐ。

「うわぁぁぁ！」

「きゃあああぁぁ！」

同時に茂みの向こうに、巨大なゴーレムが現れそれに驚いたヴィリエ達がタバサとキュルケの前に転がり込んできた。

「あなた達・・・そう。そうゆう事ね」

「真犯人」

二人の瞳に映る、へたり込むヴィリエ達。

「覚悟は」

「出来てるわよね？」

見事にシンクロする二人に、首をブンブン振りながら後退りするもサイトのゴーレムが許さない。

「「「ぎゃあああ！」」」

ヴェストリの広場に響き渡る彼らの悲鳴。

それをＢＧＭにしながら、双子月を見上げるサイトは、これでなんとか昔通りになったなと一人感慨深げに頷くのだった。

◆

「ふむ。一件落着のようじゃなミス・ロングビル」

「そのようですわね。オールド・オスマン」

学院長室にて、遠見の水晶に映るサイト達を見ながら事件の終わりを口にする。

「夜分に失礼致しましたわ」

「何かまわんよ。これも仕事のうちじゃからな。それに・・・噂に名高いイーヴァルディ殿下を見てみたかったしの。まぁ、ヘンテコな仮面でわからないんじゃが」

ロングビルから報告を受けていたオスマンは、事の成り行きを見守っていたのだ。

タバサの正体を知る彼は、イーヴァルディを一目見てみたかったと言うのもあったのだが。

「で、おぬしが知るイーヴァルディと言う人物はどんなのじゃ？」

せめてそれくらいは教えんかいと言うオスマン。

ロングビルはその問いに、見惚れるような笑みで答えたのだった。

「とても素敵な方ですわ。それこそ神話のイーヴァルディのように」

第16話

「で、タバサのお兄様のお名前はなんと仰るのかしら？」

「サイ・・・仮面ライダー」

「もう！さっきからそればかりじゃないの！何よ仮面らいだあって！」

「とある勇者の名前」

ちょっとしたカオスな一コマ。
ここはタバサの部屋である。
決闘の合間にロングビルらが綺麗に補修し元に戻った一室にて仮面姿のサイト、タバサ、キュルケは先程から堂々巡りな会話をしていた。

事の経緯はヴィリエ達に制裁を加えた後。
オスマンがロングビルを伴い現れ引き渡した事で一応の集結を迎えた。
サイトはすぐさま帰国しようとしたのだが、タバサが首を横に振りしがみつき離れなかったために今晩は泊まることとなった。
サイトにしがみつく姿にキュルケは驚き、ロングビルは睨みつけ、オスマンは指をくわえて羨ましそうだったのを一応付け加えておく。
ともかく特例として、泊まりの許可を得たサイトだが、オスマンが与えようとした外来用の客室をタバサが拒否。

「一緒じゃなきゃ、ヤ」

久々に敬愛する兄にあったのだ。
友達が出来たことも後押しをし、自制心が緩み顔をグリグリと押し付けて甘えてくるタバサに、サイトとオスマンは危うく萌え死ぬ所だったりしたのも一応付け加えておく。
まぁ、そんなこんなでタバサの部屋に来たサイトだが何故か当然のように付いて来るキュルケ。
本人弁曰わく、友達の付き添いと恩人へのお礼らしい。
そして今にいたると言うわけである。

「ねぇ、そのお面の下がみたいわ」

科を作りサイトにもたれかかるキュルケ。

「ちょ？！」

びくうと体を硬直させるサイトは、ああ…なんか久々だなぁと感慨深かったりする。

「だめ」

「あん・・・もうタバサったら可愛いんだから！」

キュルケの襟首を掴みサイトから引き剥がすタバサを見て、今度は彼女に抱き付く。

「大丈夫。あなたの大切なお兄様はとらないわ。あたしの大切なお友達のお兄様だもの」

「ん」

タバサの頭をナデナデしながら笑みを浮かべるキュルケ。

「今は話せなくても、いずれは教えてくださらない？」

「わりぃな。それは約束するよ」

頭を掻きながら、約束を口にする。

簡単に正体を証すことは出来ないサイトの立場上それが限界だったのだ。

王族と言うのもあるが、もはや彼の存在は国家戦略の為にも大きいのだ。

今は勝手に名乗ることも許されないし、タバサの正体もバレてしまう。

とくに今回のようなお忍びではなおさらである。

もっとも勘の良い彼女は、髪の色で二人の正体を察しているかもしれないが。

「ところで、お兄様は土のメイジかしら？あのゴーレムは凄かったわ！トライアングル？もしかしてスクエアかしら！」

「えっ？いや・・・別に土じゃあないかな？どっちかと言うと風と水が得意だし」

あくまでも得意とだけ言う。

まさか本当はドットの下の下の下などと期待に目を輝かせるキュルケに言えるわけもないヘタレなサイトだった。

「じゃあタバサと同じなのね！でも・・・それじゃああのゴーレムは？」

「兄様はある限定条件をクリアすれば、全属性をスクエアクラスで

扱える」

「まぁ！それは凄いじゃない！あぁ何て素敵なのかしら、やっぱり恋してしまいそう」

タバサの助け舟に、キュルケは感嘆の声をあげ舌の根も乾かぬうちに、熱っぽくサイトを見つめる。
やぶ蛇である。

「約束」

「はいはい。冗談よタバサ」

絶対冗談じゃないだろう彼女頬には伝う冷や汗。
そんなやりとりに、何だかなぁと思いつつも胸が暖かくなるのを感じた。

（テファに続いてキュルケにも会えた。本当は仮面無しで会いたいんだけどな）

勿論サイトが一方的に相手を知っているだけなので、挨拶くらいしか出来ない。
だが、このやりとりを見ていると在りし日のルイズとキュルケを思い出す。
人生をやり直してから、もう十年以上になる。
前の人生とはかなり違う立場にはなったものの、それなりに満たされる日々。
でも――――。

（ここに皆がいるんだよな）

ギーシュやモンモランシーのバカップルに、マリコルヌら水精霊騎士隊（ウォンディーヌ）の奴ら。
尊敬するコルベール先生。
そして何より―――。

（・・・ルイズがいる）

なあ、ルイズ。俺頑張ってるぞ？
お前に胸を張れるくらいにいろんな事を頑張ってるぞ？・・・こんなに頑張ってるのに、俺はもうお前の使い魔じゃない。俺達は、運命の相手じゃなかったのかよ・・・。

タバサとキュルケを見て、暖かくなる胸の内とは逆に冷たくなる心。思い出し、人知れず涙をこぼす彼にしかし仮面で二人は気付かなかった。

◆

翌日、寝不足で頭がボンヤリとするのを我慢しつつ学院長室に用があると訪ねるサイト。
勿論タバサやキュルケはついて行くと言い張ったのだが、昨日の礼をしてすぐに帰国するから授業を受けろと告げて、渋々納得し授業に向かう彼女達を見送っている。

「ふぅ～・・・」

学院長室前にて柄にもなく緊張してしまうサイト。

それも仕方ないかもしれない。
何かと記憶に残る場所なのだ。
軽く深呼吸をし、落ち着くとコンコンとノックをする。

「はい？」

ガチャッと開かれた扉からロングビルが現れ、サイトを確認すると昨日はお楽しみだったのかいと小声でちゃかす。

「ちがわいっ」

危うく咽せそうになったサイトに、冗談だよと笑いかけると中に通した。

「学院長。お待ちかねのお客様ですわ」

「うむ。待ちわびましたぞイーヴァルディ殿下」

昨日も聞いた懐かしい声に、またも郷愁の念が浮かぶサイトにオスマンが更に続ける。

「とりあえず・・・その仮面を外してはどうじゃろうか？」

色々とぶち壊しだった。

付けっぱなしだったために違和感をなくしていたそれを慌てて外すサイト。
勿論気付いていた筈のロングビルに文句を言うのを忘れないでいたが、何か機嫌が悪いのかスルーされた。

「いやぁなんかすんません」

素顔を晒し、ぺこりと頭を下げると口調は生徒にするようにしてくれと頼む。

望外な出世をしてしまっているが、もとは平凡な小市民。

恐縮されてしまっては、こちらの体が保たない。

「ほっほ。では、そうさせてもらおうかの」

「助かります」

全く持って王族らしからぬ、いや英雄らしからぬサイトの態度だが逆に好感が持てたオスマンはにこやかに話しかけた。

「話はド・ロレーヌらのことかの？あれなら然るべき処罰を下すから安心じゃて」

用件をヴィリエ達に対する処罰と思い、先手を打つオスマン。

彼らがしたことは、下手をすれば戦争沙汰になるかも知れない大事なのだ。

勿論、ヴィリエやトネーらはそこまでは思い付かなかったであろうが。

兎に角、タバサの兄であるサイトが現れたくらいだ。何かしら重い処罰を言い付ける可能性があったので、いかにサイトに好感が持てても生徒達を一度や二度の悪さで命の危険にさらすつもりは更々なかった。

「いえ・・・まぁそれもあったんですが、学院内での事はそちらに

任せますんで」

「ほう・・・では、何が本題かの？」

チラッとロングビルを見るオスマン。

「ああ、ロングビルさんも関係あることなので」

それに気付いたサイトが、退出しなくて良いと告げる言葉に、ふむと頷くオスマン。

「となると、アルビオンのレコン・キスタの事かの？」

人好きのする顔を一転、険しくすると訪ねる。

室内は先ほどの柔らかさはなく、ピリピリと肌を差す空気が流れていく。

「はい。レコン・キスタです。学院長はどこまでご存知ですか？」

「うむ。恥ずかしながら世間に言われているくらいしかわからんの。昔ならともかく、今は単なるジジィじゃからの」

全く情けない限りじゃと続ける。

そんなオスマンはサイトの言葉の意味を考える。

「そのような事を聞いてくると言うことは、反乱などと簡単なものではないようじゃな」

コクリと頷くサイトに、長くのばした顎髭を撫でながらロングビルをまたも見るが、彼女は微動だにせず、話を聞いている。

（そう言えば彼女は、アルビオン縁のものじゃったなぁ）

ならば動じないのも当然。
彼女がタバサを護衛し、またタバサがガリアの密偵として学院に潜伏しているのは承知しているし、タバサが学院生徒の情報を流しているのも、今は危険がないと判断して黙認している。

「恐らくは、何者かが裏で糸を引いておる。恐らくは新興国のマケドニアかのう？じゃが・・・そうだとしてこの様な話しをワシにして良いのか？」

流石はオスマンと言った所。情報らしい情報を与えずとも推理して当てる彼は、もっともな疑問を口にする。
いかにトリステインに未だ強い影響力がある学院長といえども、所詮は他国の者でしかなくその懸念は正しい。
だが、今回は違う。
少しでも昔の歴史通りになるのなら、この学院の生徒達がその中心になることをサイトはよく知っている。
ならば、もしもの時の為に助けてくれるのは、ここにはいないコルベールとそして、オールド・オスマンしかいないのだ。

「今回は事情が違いますから。我らガリアの調べではマケドニアの尖兵たるレコン・キスタは各国に潜伏しています。そして・・・アルビオンの次に標的になるのはこの国でしょう。言いにくいですが、この国は攻める要因が多すぎる」

軍事・経済・腐敗などとあげればきりがない理由に、オスマンもにがり切った表情で理解を示す。

「それに、この学院には未来を担う貴族の子弟が多く通う。中にはアンリエッタ姫殿下の覚えが良い者もいるでしょう」

「なるほど・・・人質と言う訳じゃな」

返された言葉に重々しく頷く。
実際、学院がそれで狙われたことがあるのをサイトは知っているので笑い事では済まされない。

「ふむ。わかった。お主の言葉肝に銘じておくわい」

なかなかに考えさせられたわいと、空気を弛緩させて元のエロ爺に戻るオスマン。
それを合図にしてか、ロングビルが立ち上がりお茶を煎れていく。

渡された紅茶で喉を潤すサイトとオスマン。
それからはたわいもない話を交わしていたのだが、ふと悪戯心が湧き出たサイトは爆弾を落としてみることにした。
ガリアでも極一部しか知らないであろう機密情報。
タバサからの報告と、サイトやジョゼフらの推理により未確定ながら最早決定していると言っても良い話。
いずれは知る事になるのだ。
それが今でも悪くはない。いや寧ろ良いかもしれないと判断したサイトは自身に与えられた裁量で可と判断し発せられた言葉に、油断していたオスマンはおろかロングビルすらも仰天させる事になる。

それは一人の落ちこぼれの少女の名前と、その少女が目覚めるであろう伝説の系統。

その伝説の系統と少女の名前。

その名前は――――。

「ルイズ・フランソワーズは伝説の虚無の系統ですよ。オールド・オスマン」

図らずとも、運命の日はもうそこまで来ていた。

ゼロから始まる、彼女の物語。

それがどのような物語になるかは、未だサイトですら検討がつかない。

今の彼はルイズの使い魔ではないのだから。

後幾つかの季節を巡ると聞こえてくる、春の来訪を告げる足音。

そしてそれと共に、流れ出す運命の序曲。

――目覚めの日は近い。

第１６話（後書き）

ここまで読んでくださって誠にありがとうございます。
ひょっとしたら暫くの間更新出来ないかもしれません。
ちょくちょく覗きには来ますし、なるべく早くはするつもですが、
今までのような更新スピードは恐らくは無理になります。
こんな作品でも楽しんでくれている方々には申し訳ないのですがまたの更新日にお会いしましょう。

第17話

サイトの告白に、さすがのオスマンも度肝を抜かれたのか紅茶を吹き出し、ロングビルも整理途中の書類の束をバラまくなどのハプニングがあったものの、今はとりあえず落ち着きを取り戻していた。寧ろこの程度の驚きや、話を真面目に聞こうとする姿勢を見せるだけマシとも言えた。
それだけ《虚無》とは骨董無形な話なのだ。

「ミス・ヴァリエールが《虚無》の担い手とな？」

先のマケドニアの話と同じくらい、いや人の欲と言うものが一番分かり易く絡む可能性があるこの話にオスマンの表情が険しくなる。

「はい。確証はないんですけどね・・・彼女の事例に良く似た人物がいまして」

「ふむ。と言うことは、既に他に《虚無》の担い手がいると言うことかね？」

ルイズだけでも一大事なのに、話し方によればガリアは既に担い手を抱えているとも聞こえてくる言い方。
ただの一学院長に話す内容ではないそれに、オスマンは目を細めてサイトの次の言葉を待った。

「この話は先のマケドニアの話にも繋がります。だからこそ信頼の証として、話してます」

真摯なサイトの言葉に、オスマンは探るような瞳で見るも何も感じれない。
そもそも僅かな会合であるが、彼が真っ直ぐな、あまり腹芸にたける人物ではないことは見抜いている。

（ワシの取り越し苦労かの）

此処まで聞いたのだ。
ならば、最後までつきあうのが筋だろう。
オスマンは今一度精神を落ち着かせ、ロングビルもまた背筋を伸ばしサイトの言葉を待つ。

「先ほどのガリアが担い手をと言う話ですが、これはＹＥＳです」

その言葉に緊張が走る。
正直な所《虚無》は伝説の彼方の魔法。
それがどういったものかなど詳しくしらない。
だが伝説に語られる僅か半分、いや更にその半分でもその力はあまりにも強大すぎるのだ。
サイトにその気はなくとも、ガリアの国が何かをしでかすやもしれないのだ。

「心配しなくとも、大丈夫ですよ」

今のところはね。と最後の部分のみ心の中で言い笑顔で答える。
正直なところ未来のことなどわからない。
もしかすると、ジョゼフではなく自分が狂う未来もあるかもしれないのだ。
サイト自身以前と大分変わっている。

幾分、外見や今までの生活のせいで精神に幼さが残っているとはいえど、以前ほど何も無しで動くほど幼稚ではない。
まぁ感情的なものはなかなか治らないのだが、それでもこの世のすべては、いつまでも変わらないままと言うことはない。

「なぜガリアにいるのか、なぜ担い手の方法がわかるのかは答えられませんが・・・学院長なら恐らくわかるでしょう」

伝説では、始祖は三人の子供と一人の弟子に力と国を与えたと言う。
王家の傍流たるラ・ヴァリエールと、魔法が使えないその家の三女。
頭が働くものなら、すぐにわかるだろう。
ガリアもまた始祖の家系であり、魔法が使えない王家の誰かが《虚無》だったと。そして、魔法が使えなくて蔑まれていた者がいる。

「ガリア王――――ジョゼフ陛下かの？」

「ご名答」

流石ですねと続けるサイト。

「一瞬お主が担い手かとも思ったんじゃが・・・【イーヴァルディの勇者】は《メイジ殺し》で有名じゃからな。ただ昨日あれほどのゴーレムを見せられたからの・・・それで話はまだ続くのじゃろう？」

「はい。そして、それから推測できる事があります。ガリア、トリステインの始祖関係者がほぼ同時期に《虚無》に目覚めると言うことから言えること」

「まさか・・・アルビオンやロマリアでも同じ事が？」

今まで座して聞くだけだったロングビルが、我慢できなかったのか口を挟んでくる。

彼女の場合ティファニアと言う存在が思い浮かんだのだが、直ぐに気のせいだと頭から消す。

「その可能性は高いかと。嘘か本当か知りませんが、アルビオンではレコン・キスタの盟主が《虚無》と聞きます」

勿論これは嘘だと知っているも、そこまで親切に言う必要はない。話の途中で恐らく理解するだろう。

「一番いやな可能性は、マケドニアの王が《虚無》の場合です。自らを大王と名乗るくらいですから」

サイトの一番の不安はこれだ。

今までの法則から言えば、いかに可能性があっても5人が目覚める、もしくは始祖直系の国以外の人物が目覚めるなどないはずなのだが、世の中に絶対などはない。彼自身あり得ない人生を送っているのだ。何事にも裏道や例外はある。

とくに、本来と似て非なる世界を見せる二度目の世界なのだ。不安は耐えない。

「なるほど・・・。マケドニアが絡むのなら、先の学院の安全の件からして繋がってくるか」

「はい。だからこそ学院長にと」

「その話は、トリステインやアルビオンには？」

ロングビルが問うも首を振るサイト。
それを見て、若干顔を険しくする彼女。
実際はトリステインじゃなくアルビオンだけを聞きたかったのだろう。

「アルビオンには、一応すでにクロムウェルと言う《虚無》がいるから。もっとも真偽は調査中だけどね。アイツは単なる平民の神官だ。もし《虚無》なら、ロマリアの担い手になる可能性が高い」

「じゃあアルビオンの担い手が他にいるって事じゃ・・・まさか！？」

ティファニア―――。

先ほどの思いがぶり返す。
顔を青ざめる彼女に頷き話す。

「可能性はそれが高い。だからこそ言えない」

言えば使い潰される可能性が高い。
心優しい彼女は、誰かを守るためならば戦場に立つだろう。

（しかし、そんな事は許さねぇ）

いずれ戦場に立つとしても、今はまだ早い。
彼女を守る段取りがくめていないし、サイト自身が彼女のそばにいれないのだ。
軽挙は謹まなければならない。
たとえそれで、アルビオンが傾国の憂き目にあおうとも今は我慢す

るしかない。レコン・キスタとの事は現段階ではあくまで内政問題であり、そもそも軍事同盟を組んでいるわけではなく、また助けを求める要請もない。
安易にアルビオンに口出しする事などできるはずもなく、また徐々にではあるが彼の国には簡単には渡国出来なくなりつつある。
そんな状態の所に、無理して赴き爆弾を落とすこともない。
全ては、後に笑顔になるために。
そのためには、順序がありジョゼフやシャルルらは今はまだ《虚無》が出張るときではないと言っている。
アルビオンの真の担い手に心当たりがありそうな、サイトとロングビルの会話に、しかし分をわきまえたオスマンは立ち入らない。

「トリステインの場合は・・・アンリエッタ姫殿下や学院長には悪いけど、この国は信用に値しない」

「それは仕方がないことじゃよ。この国は腐っとるからの」

ズバリと言いきる彼もやはり思うところがあるのだろう。
齢三百歳とも言われるオスマンは、この国の栄華と衰退を一番近くで見てきたのだ。

「そしてラ・ヴァリエール・・・ルイズの両親にも今はまだ言えません」

「公爵にもか？ご両親には伝えるべきじゃろうに。厳しいと評判じゃが、それ以上に子煩悩とも聞くぞ？」

意外そうな顔をし、サイトの顔を見るオスマンに、散々いたぶってくれたあの両親を思い出ししかめっ面をする。

「子煩悩ね。ま、それはそうですけど・・・だからこそですかね」
昔の記憶を探り、戦争に行くときの諍いを思い出す。
ただでさえ、ルイズが戦場に立つのは許さない彼らだ。
もし《虚無》と知り、それを国が利用しようとすればトリステインに杖を向けるかもしれない。
公爵として、いや貴族としては失格だが父親としては正解な行動。
実際サイトは知らないが、ルイズに王位継承権を与える話の時にアンリエッタにもしもの場合はと公爵は告げている。
唯でさえ、混乱していく国勢に余計な種はまきたくない。

「俺もルイズが・・・いえ、一生徒が戦場にたったり利用されたりするのは反対です。でも、国だけでなく両親の利己的な判断で振り回されるのも良しとは思いません。公爵にはしかるべき時に話すべきです」

否が応でも、ルイズが物語の主人公となるはずだ。
トリステインは彼女無しでは、保たないちっぽけな国なのだ。
ならば、せめて彼女は自分で戦うか戦わないかを選ぶべきなのだ。

（その時・・・隣にいるのは俺じゃないかもしれねえけど）

湧き上がる切なさを押し殺し、その想いをかけらも見せることなく彼はオスマンとロングビルを見る。

「まったく・・・次から次へとようもそう難問を突きつけよるわい」

決して嫌みではなく、苦笑をこめての言い方。
オスマンのそれにロングビルも頷く。こちらは少し疲れ気味だ。
与えられたら情報量とその内容に困惑しているのだろう。

だが彼女とて、ティファニアの姉という立場にいる以上は無関係ではないのだ。
疲れた表情を見せつつも、その瞳には何かしらの強い決意が見えた。
「戦争や政治は《虚無》だけでは成り立たん。じゃがそれを理解しない盆暗貴族達に若い彼女や未だ見ぬ担い手らが、ただ欲望のままに使い潰されるのは避けねばならんな」
重々しい口調で、椅子に背中を預け目を閉じる。
閉じた瞳がなにを見ているのかはサイトにはわからない。
彼は多少利己的な所はあるが、それは誰もがそうだ。サイトが知る貴族の中では遥かに良い貴族、いや良い人間に分類される彼ならばきっと生徒を護ってくれると確信している。
ぎぃ・・と椅子が軋む。
「よかろう。いずれ誰かが知るときは来ようが、それまでは今ここの話は胸に留めておく。勿論、ラ・ヴァリエール嬢の安全にも出来うる限り手を出そう」
良いなとロングビルに視線を送り、彼女も頷きで了承の意を返す。
「ありがとうございます。レコン・キスタが《虚無》を掲げ、また各国で担い手の目覚めが確認されつつある現状では間違いなく《虚無》を巡る争いが起きると予想できてしまう。この学院が担い手やそれに携わる人達の拠り所になること願います」
本来ならばより力のあるガリアがすべきなのだろうが、力ある他国だからこそ出来ないこともあるのだ。
駆け込み寺ではないが、そうなるように願ってしまう。

勿論、サイトも出来うる限りバックアップするつもりはある。

「本当は、レコン・キスタの《虚無》の真偽とマケドニアの関係を付けばよいのですが、どちらも確証どころか証拠がありませんからね」

そもそも公然の秘密として、密偵などの情報部はあるがそれを各国に忍ばせるスパイ活動は基本的には禁止されている。動かぬ証拠があるならばともかく、推理だけの言質では逆に国際的に避難されてしまいかねない為今まで通りに個人で出来ることは何とかしなければならない。

「我らに出来ることは、我らでやる。差し当たっては生徒達の未来のためへ・・・じゃな」

ふぅ〜と息を吐き出し、溜まっているモノを抜き去る。疲れたわいと零すオスマンに、ロングビルは今度こそ話が終わりだと悟り彼女も固まった体をほぐしていく。今は何時くらいだろうか？かなり話し込んでしまったサイトは改めてオスマンに頭を下げた。

「長々話し込んじゃってすんません。それと色々とありがとうございました。勝手な言い分で重荷を背負わすことになっちゃって」

「何かまわんよ。むしろありがたいわい。それに時間など気にする事はないぞ」

「学院長はいつも暇ですからね」

ロングビルの厳しいと突っ込みにそっぽを向く。たまには仕事をな

さってくださいと言う彼女の目は笑ってない。

「ワシはここにいるのが仕事じゃて」

堂々とダメ人間発言するオスマンに、どこの天下り役人だよと思うサイトは乾いた笑いをこぼすのみ。

これが彼らのいつもの光景なのだろう。

（マチルダさん・・・苦労してるんだろうな）

本来の口調からは見えない、意外に真面目な彼女に心の中で合掌するサイトだった。

あらかた話は終わりを迎え帰ろうとするサイトだったが、突然ドゴオオォォンと言う轟音と共に校舎が揺れた。

「な、なんだ?!」

またマケドニアの襲撃かと身構えるサイトだが、オスマンやロングビルは別段あわてる様子もない。

それどころか、ああまたかと言った雰囲気にサイトは昔よくあった事を思い出した。

「これって・・・?」

「うむ。まあいつものことじゃて」

ああ、やっぱりそうだ。よく標的にされたっけな。

その言葉に、懐かしさが溢れる。

オスマンとロングビルがルイズの爆発に話の花をさかせる数分間、サイトは思い出の回帰に浸るも、しかしそれを押し殺すと仮面を被り辞退を告げる。

（・・・ここにいたら思い出と共に涙があふれそうだ）

オスマン達の返事を待たずにきびすを返そうとするサイト。

その数分間がいけなかったのか――――。

それとも彼を哀れに思った神の慈悲か――――。

扉をノックする音とともに現れる一人の少女。

「失礼します。先程の爆発の件で参りました」

桃髪の小柄な女子生徒が、罰悪げに入室する姿を見て固まるサイト。

そんな彼にオスマンはなにを思ったのかある提案をして来た。

「帰る前に、彼女と話でもしてみんかね？」

それは彼にとっては、悪魔の誘惑のような甘い提案。

気合いを入れて、いざ部屋へ来ると仮面を被った珍妙な人物と、オスマンの言葉に理解できず戸惑うルイズ。

そんな彼女を見て、知らず知らずのうちにサイトの口から彼女の名前が零れ落ちても仕方なかっただろう。

「ルイ・・ズ・・・・・・？」

今まで何度その名前を呼んだだろう？
今まで何度逢いたいと、その名前を叫んだだろう？

今その少女が目の前にいる。

どうするんじゃと返事を待つオスマンと、いきなり仮面の人物に名前を呼ばれ戸惑うルイズ。

そんな彼らに対して、それにサイトは頷くわけではなく―――。

突然わいた出来事にただただ立ちすくむ事しかできなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9849k/

ゼロのイーヴァルディ

2010年10月9日15時02分発行